椿姫

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
椿姫

【Ｎコード】
Ｎ３６６２Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
パリの裏社交界の花である高級娼婦ヴィオレッタ。純粋な青年アルフレードの告白を受け一度はその愛を楽しむ。しかし病と現実が二人を引き裂き遂には。ヴェルデイの作品の中でも屈指の名作です。是非オペラの方も御覧になって下さい。こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

第一幕その一

第一幕　出会い

パリのとある豪華な屋敷において華やかな舞踏会が繰り広げられていた。もう真夜中だというのにそこだけは明るかった。左手に大きな暖炉が、そして右手には鏡がある。その中央には様々な料理が置かれたテーブルがあった。そのテーブルは大理石であった。

そのテーブルの席に一人の女性が座っていた。スラリとした背の高い女性であり白い絹の豪奢なドレスを身に纏っている。その顔は面長で鼻が高く黒く長い絹の如き髪と琥珀の様に黒い目を持っている。鼻は高くそれが全体の美貌を決定的なものとしていた。その顔は白くまるで雪の様であった。化粧をしていてもそれは隠せず身体全体に何かしらけだるいものも漂わせていた。胸には赤い椿がある。

彼女の名はヴィオレッタ＝ヴァレリー。パリの社交界の花として知られている。だがそれは表立った花ではないのである。

彼女は娼婦であるのだ。貴族や金持ち達を相手とする高級娼婦である。日本で言うならば太夫であろうか。田舎の貧しい家に生まれたがパリに出て針子をしているうちにあまり気品のよくない貴族に出会い彼によって娼婦とされたのである。その美貌と貧しい生まれであることを感じさせない生まれながらの気品と娼婦とは思えない程の慎ましやかな性格によって忽ち今の座を得たのである。今この場にいるのはそうした夜のパリの住人達であったのだ。

「やあやあ」

その場に何人かの男達が入って来た。

「遅れて申し訳ありません」

「遅いですぞ、全く」

背の高いフロックコートの男が彼等に対して言った。

「何をしておられたのですかな」

「いえね、ちょっと」

男達の中の一人がそれに答えた。
「フローラの家でトランプに興じておりまして」
「ほう」
「それで遅れたのです。申し訳ありません」
「左様だったのですか」
「はい」
そこに当人が出て来た。赤い髪に青い目を持つ女性であった。青いドレスを身に纏っている。
「申し訳ありません、私のせいで」
「いえ」
席に座っていたヴィオレッタがそれに答えた。
「そんなこと。構いませんわ」
「宜しいのですか？」
「はい」
ヴィオレッタは頷いた。
「まだ夜は長いのですし。皆さん」
そう言って席を立った。
「まずは飲みましょう」
その手に杯を持つ。クリスタルの杯であった。そこにはシャンパンがある。
「この賑やかな宴は杯を重ねてこそ楽しめるものなのですから」
「全くです」
客達がそれに頷いた。
「それでは飲むと致しますか」
「はい」
「お待ち下さい」
だがそこにフローラと先程のフロックコートの男がやって来た。見ればこのフロックコートの男は中々の美男であった。髪は白く顔は彫が深く緑の目の色は深かった。まるで森の様に。
「ガストーネ男爵まで」

ヴィオレッタは彼の名と爵位を口にした。
「一体どうされたのですか？」
「どうされたも何もありませんよ」
「全くですわ」
フローラもそれに頷いた。
「お身体に障りますぞ。あまり飲まれると」
「これのことですか」
ヴィオレッタはクリスタルの中にあるシャンパンを見て言った。そのシャンパンは水晶の中でシャンデリラの光を浴び色のついた光を放っていた。水晶もまたそのシャングリラの光を放ち七色に輝いていた。それ等の光がヴィオレッタの白い手を照らしていた。
「勿論ですよ」
ガストーネは答えた。
「あまり飲み過ぎると」
「本当にどうなっても知りませんよ」
「お気持ちはわかりますが」
ヴィオレッタはそれに応えた。
「病は気からとも申しましょう。私は今気を晴れやかなものにしたいのです」
「だから飲まれるのですか？」
「はい」
彼女は頷いた。
「享楽に身を任せる・・・・・・。それが私にとって何よりの薬なのです」
「左様ですか」
ガストーネもフローラもそれを聞いて哀しい顔になった。ヴィオレッタはその間にそのシャンパンを口に入れた。
「はい。人生は短いもの。特に私にとっては」
ヴィオレッタは苦しそうな顔でそう述べた。
「ならば楽しまなくては。違うでしょうか」

「それもまた人生ですが」
だがガストーネはそれに賛同したくはなかった。
「別の生き方もありますよ」
そしてこう言った。ヴィオレッタにはその生き方を選んで欲しかったのである。
「別の生き方ですか」
それを聞いて自嘲めいた笑みを浮かべた。力のない笑みであった。
「私に。娼婦の私に他にどのような生き方があると」
「ありますよ」
フローラは言った。
「きっと。見つけたいと思いませんか」
「生憎」
首を静かに横に振った。
「このパリで。華やかに生きていたいです」
「そうですか」
「なら仕方がありませんな。私達が言えるのはここまでです」
「男爵」
「マダム、いいですから」
眉を顰めさせて問おうとするフローラにそう言った。そしてまた言った。
「それは置いておきまして」
「はい」
彼は話題を変えにかかった。
「実は私に友人が一人おりまして」
「お友達ですか」
「ええ。貴女に御会いしたいと言っているのですが宜しいでしょうか」
「構いませんよ」
ヴィオレッタはにこやかに笑ってそう答えた。
「どなたでも。私なぞに御会いしたいという方はどなたでも歓迎さ

せて頂きます」
「わかりました。それでは」
「どなたなのですか？」
ヴィオレッタはそれは問うた。

第一幕その二

「男の方ですか？それとも女の方ですか？」
「男の方です」
ガストーネはそう答えた。
「男の方」
ヴィオレッタはそれを聞いて一瞬であるが顔を顰めさせた。娼婦である彼女にとって男とは特別なことを意味しているのである。
「宜しいですね」
「はい」
彼女は胸にある椿を確かめてからそれに応えた。
「今日は。宜しいですわ」
「わかりました。それでは」
「はい」
ガストーネはそれに従い後ろに姿を消した。ヴィオレッタはそれを見届けながら一人心の中で考え込んでいた。これからの夜のことを。
（今日もまた朝まで二人なのね）
仕事のことを考えていたのだ。
（それが私の仕事なのだから。そうしないと私は）
ここで胸が急に苦しくなった。
「うっ」
「ヴィオレッタ」
それを見たフローラが慌てて駆け寄って来た。
「一体どうしたの！？」
「いえ、何でもないわ」
ヴィオレッタは無理に笑って気遣うフローラに心配をかけまいとした。
「ちょっとね。お酒にあたったかしら」

「じゃあもう休んだ方が」
「大丈夫よ」
しかしそれは断った。そしてこう言葉を返した。
「もう大丈夫だから。それより」
「ええ」
「ガストーネさんの連れて来られる方はどんな方なのかしら。楽しみね」
「そうね」
フローラもそれに相槌を打った。
「けれどそんなに心配する程のこともないと思うわ」
「そうかしら」
「あの方が紹介して下さった方は紳士ばかりだし。今までそうだったでしょ」
「ええ、まあ」
それは他ならぬヴィオレッタが最もよくわかっていることであった。それに頷いた。
「だから気に病む必要はないわ。それより楽しみましょう」
「飲むの？」
「違うわよ。どうして貴女はそうやってすぐにお酒に向かうのかしら」
「すぐに逃げられるからかしら」
寂しげな笑みを浮かべこう答えた。
「お酒を飲めば。何もかも忘れられる」
「そうなの」
「他にも理由はあるけれど。けれど私にお酒は似合ってるでしょう？」
「そういう問題じゃないと思うわ」
だが彼女はそんなヴィオレッタに対してそう忠告した。
「お酒は。貴女みたいな飲み方をしていると身体に悪いは」
「それもいいのよ」

その寂しげな笑いがさらに深くなった。そしてまた言った。
「どうせ。私なんかには」
「どうしてそんなことを言うの？」
「悪いかしら」
今度はその寂しげな笑みをフローラに対して向けた。整った顔をしているだけにその寂しさはさらに人々の心に滲み入るものであった。それがさらにフローラの言葉も声も圧迫していた。
「けれどね」
「貴女の言いたいことはわかっているけれど」
「それじゃあ何故」
「見て」
ヴィオレッタは辺りを指差しながらそう言った。今彼女達の目の前では着飾った紳士や淑女達が華やかな宴に興じていた。誰も監督に声をかけようとはしなかった。
「わかっていても出来はしないことがあるのよ」
「そんなものが」
「あるのよ。それもすぐにわかると思うわ」
力のない言葉をまた口に出した。
「それでもいいのよ、やっぱりね」
「そうなの」
「ええ。けれど気持ちだけは受け取っておくわ」
「有り難う。あら」
フローラは後ろのカーテンが動いたを認めた。
「ヴィオレッタ」
「何かしら」
そして今度は別の切り口でという形になっていた。
「男爵が戻って来られたわ」
「あら」
「ええと」
フローラはヴィオレッタに先立ってその客人に目をやっていた。

そして細かく分析を開始したのであった。
背は高くスラリとしている。顔は気品があり全体的に若い。二十代前半といったところか。顔には若さが漂っていた。
服はタキシードであった。その生地の下地を見ればそれだけでもうかなりのものであった。それをそつなく着こなしている。まるで普段着の様にその服を着ていた。
「立派そうな方ね」
「そうなの」
「歳は・・・・・・貴女より下だと思うわ」
「私よりも」
「それでもいいかしら」
「そうね」
ヴィオレッタは思案しながら言葉を返した。
「私は別に構わないわ」
様子を見る為にそう返したのであった。そうこうしている間に男爵とその青年がやって来た。
「只今戻りました」
「はい」
ヴィオレッタは男爵にそう返した。
「彼がその青年です」
「はじめまして」
その若者はヴィオレッタに挨拶をした。
「アルフレード＝ジェルモンと呼ばれます。以後お見知りおきを」
「はい」
ヴィオレッタはそれに頷いた。
「私は」
「ヴィオレッタ＝ヴァレリーさんですね」
「え、ええ」
名乗るより前に自分の名を言われいささか戸惑いを覚えた。
「この屋敷の主でございます」

「この若者は非常に心優しい青年でして」
ガストーネが前に出て来た。そしてヴィオレッタに対してアルフレードをそう紹介する。

第一幕その三

「毎日貴女のことを気にかけていたのですよ」
「私のことをですか」
「勿論ですよ。そんな顔色では。まるで雪の様ではないですか」
「これですか」
ヴィオレッタは顔色のことを言われ困った顔を作った。
「これはもう生まれつきですので」
「そうだったのですか」
「ええ、まあ」
ガストーネより先に驚いてそう尋ねてきたアルフレードに対してそう返す。
「ですから。あまり御心配為さらないで下さいね」
「だといいのですが」
「御心配ですか？」
「勿論ですよ。今までこれ程美しい方は見たことがありませんし」
世辞にしてはあまりにもストレートであった。
「心配せずにはいられません」
「お気遣いは有り難いですが」
ヴィオレッタは言葉を返した。
「けれど私には」
「何があるのですか」
「・・・・・私のことは御聞きになっておられるでしょう」
「無論です」
既に何を聞かれるのかはわかっていた。静かに頷いた。
「それでは」
「いえ」
今度はアルフレードが首を横に振った。
「ヴィオレッタさん」

「はい」
いきなり彼女の名を呼んできた。ヴィオレッタはそれに応えた。
「僕は貴女に御会いする為にここに来ました」
「私にですか」
「ええ」
そしてまた頷いた。
「そのうえで言わせて頂きます。本当に大丈夫なのかどうか」
「お気遣いの結果」
やんわりと返してきた。
「ついこの前の疲れが嘘の様に。こうしてお酒を楽しめるようにもなりました」
「それは何よりです」
アルフレードはそれを聞いて顔を綻ばさせた。
「では僕もそれを楽しむといたしましょう」
「それでは私が」
ヴィオレッタはそう言って一歩進み出てきた。そのうえでこう言った。
「エペになりましょう」
ギリシア神話における青春の神である。オリンポスでの宴において神々にエクタル、すなわち不老長寿の酒を注ぐ女神なのである。
「有り難うございます」
アルフレードは彼女に慇懃に礼を述べた。
「では僕は貴女にそのエクタルによって永遠の命が授けられることを祈ります」
「有り難うございます」
ヴィオレッタも礼を述べた。だがどういうわけか永遠の命と聞いたところでその顔を暗くさせた。
「侯爵」
「何でしょうか」
ここでガストーネは友人であるドビニーに声をかけてきた。

「貴方もどうですかな」
「悪くはないですな」
「貴女も」
「はい」
フローラにも。彼女も当然のようにそれに頷いた。
「それでは皆さん宜しいでしょうか」
「はい」
この宴に参加している全ての者がヴィオレッタの呼び掛けに応じた。
「乾杯の歌を」
「アルフレードさん」
「はい」
ヴィオレッタはアルフレードに声をかけてきた。彼もそれに応じた。
「乾杯の音頭をとって頂けるでしょうか」
「宜しいのですか？僕で」
「ええ」
ヴィオレッタはにこりと笑ってそれを認めた。
「どうか宜しくお願いします」
「わかりました。それでは」
それを受けてまずは畏まった。
「いきますよ」
「はい」
アルフレードは口を開いた。その口で乾杯の音頭を取った。歌によって。
「皆さん、杯を乾かしましょう、この美によって飾られた楽しい杯を」
「ええ！」
皆それに応えた。
「この束の間の幸せの時を快楽に身を任せるのです。そして愛をそ

そのかす妖しい甘い震えの中に全てを委ねるのです」
「甘い震えの中に」
「はい。そして美しい眼差しが」
ここでヴィオレッタを見た。
「胸に全能の力を与えてくれるでしょう」
「そう、その通り」
「快楽に全てを委ねよう。皆で」
「マドモアゼル」
誰かがヴィオレッタに声をかけてきた。
「貴女も」
「私もですか」
「はい。是非共」
「・・・・・・・・・・」
先程のアルフレードの視線には気付いていた。今も見ている。彼女はその視線がわかっていた。そしてそれに応えるかのように再び立ち上がった。そして歌に参加してきた。
「私の楽しい時を皆さんと共に過ごすことを御許し下さい」
「勿論ですとも」
皆喜んでそれを迎えた。

第一幕その四

「喜びがなくしてはこの世というものは何の意味もありません。この儚い世も楽しみがなければなりません」
「そう、その通り」
「愛の喜びもまた束の間のこと、素早く飛び去ってしまいます」
「愛とは儚いもの」
「それは咲いては萎む花です」
ヴィオレッタはここで自分の胸にある椿を見た。
「その美しさを長く楽しむことはできません。しかし今は楽しみましょう」
「貴女と共に」
「有り難うございます」
ヴィオレッタはそれに応えた。ここでアルフレードがヴィオレッタに歩み寄り声をかけてきた。
「マドモアゼル」
「はい」
「命は何処にあるのでしょう」
「それは喜びの中にあります」
ヴィオレッタはにこりと笑ってそう答えた。
「愛という喜びの中にこそ」
「そうなのですか」
アルフレードはそれを聞いて考えた。ヴィオレッタを見詰めながら。それからまた言った。
「愛し合うことをまだ知らない時にはどうなるのでしょう」
「それは私にもわかりません」
彼女はそう返した。
「私は愛を知りませんから。そして」
ふと一瞬アルフレードから視線を離した。それからすぐに元に戻

して言った。
「貴方のこともまだよく知りませんし」
「それでもいいです」
だがアルフレードはそう返した。
「私は今までこうしたことがよくありましたから」
「まあ」
「それが私の宿命なのですよ」
そう言いながら熱くヴィオレッタを見ていた。だがそんな二人に気付く者はここにはいなかった。歌は続いていた。
「楽しみと微笑みで全てを包み込みましょう。そこからこの楽園で新しい日が生まれるのですから」
「マドモアゼル、貴女も」
「はい」
「ムッシュも」
「わかりました」
ヴィオレッタとアルフレードもその中に入った。そして宴はさらに盛り上がってきた。そして歌が終わったところでヴィオレッタは言った。
「皆さん」
「何でしょうか」
「ダンスを楽しみませんか。歌もあったことですし」
「ダンスですか」
多くの者がそれを聞いてにこやかに応えた。
「はい、どうでしょうか」
「いいですね」
「それでは行きましょう」
「はい」
ヴィオレッタも向かおうとした。だがここでその顔が急激に蒼ざめだした。
「ああっ」

そう言ってテーブルに手を着いた。
「どうしました？」
「いえ、ちょっと」
そう言って誤魔化そうとする。
「お酒を飲み過ぎたようで。暫くここにいて宜しいでしょうか」
「仕方ありませんから」
「それでは私達だけで」
「はい。お先に」
こう言って客達を先に行かせた。彼女一人を残して皆舞踏の間に向かった。やがてそこから華やかな音楽が聴こえてきた。
「ふう」
ヴィオレッタは座って一息ついた。暫くして側にあった鏡を手に取った。それで自分の顔を見た。
「何て肌の色なの」
見てまず愕然とした。蒼白であったのだ。
「まるで雪の様。かっては赤くてかえって恥ずかしかった程だというのに」
そう言って落胆する。そこでアルフレードが側にやって来た。
「あの」
「はい」
それに応えて顔を彼に向けた。
「大丈夫ですか」
「ええ、まあ」
にこりと笑顔を作ってそれに応じた。
「元気になりましたわ。お気遣い有り難うございます」
「それは何よりです。ところで」
「何でしょうか」
「いつもこうして夜遅くまで宴を開いているのですか？」
「そうですけれど」
これは彼女の仕事でもあった。娼婦は夜の世界の住人である。だ

から夜にこうした場を設ける。そして客の相手もするのである。
「あえて申し上げますがお身体には」
「わかっております」
ヴィオレッタはそう答えて頷いた。
「では何故」
「私のことは御存知でしょうか」
彼女はそれでも問おうとするアルフレードに対してそう言った。
「それはどうなのでしょうか」
「はい・・・・・・」
さらに問うとアルフレードは頷いた。
「勿論です。そのうえでこちらにお伺いしたのですから」
「ではもうおわかりですね」
「はい」
だが彼はそれでも言った。
「けれど若し貴女が」
「私が・・・・・・何か」
ヴィオレッタは顔を見上げた。
「僕のものならこのようなことは」
「させないとでも仰るのでしょうか」
「駄目でしょうか」
「面白い方ですわね」
「面白い」
「ええ。私はこの様な立場に身を置いております。そのような私に対して仰るとは」
「それが何か」
だがアルフレードはそれにも臆しはしなかった。
「この世に貴女を愛さない者なぞおりはしません」
「誰一人としてでしょうか」
冗談めかしてそう問うてみた。まさかとは思った。
「はい」

しかし彼は本気で頷いたのであった。これはヴィオレッタの予想外であった。

「・・・・・・・・・」

「僕もそうですから」

「本当に面白い方だこと」

一瞬沈黙してしまったがすぐにそう返した。

「そんなことを仰るだなんて」

「お笑いになられるのですか？」

「それが何か」

真摯な態度のアルフレードに対してヴィオレッタのそれは何処か大人のものであった。だがその心の中はまた別であった。揺れていたのである。しかしそれは決して見せはしない。

第一幕その五

「笑われるのですか」
「はい」
ヴィオレッタは答えた。
「おかしいですから」
「馬鹿な。何故このようなことを聞いてお笑いになられるのか。貴女は心を持ってはおられないのですか？」
「心ならありますわよ、多分」
彼女は言った。
「けれどどうしてその様なことをお尋ねになられるのでしょうか」
「持っていらっしゃるなら・・・・・・」
アルフレードは沈痛な声で言った。
「その様な言葉は」
「本気で仰られているのですか？」
「僕は嘘なぞ言いません」
アルフレードは眉を顰めてそう言い返した。
「そんなこと。どうして言えましょうか」
「では御聞きしたいですわ」
「何でしょうか」
「私を想って下さっているのは以前からでしょうか」
「はい」
彼はまた頷いて答えた。
「一年も前から。あの公園でのことです」
彼の目の前にその時のことが想い浮かぶ。
「パリのあの公園で。朝におられましたね」
「そうだったでしょうか」
「その朝日の中に貴女を見た時に僕の心は奪われました。そしてそれが何なのかを知るまでに多くの時がかかりました」

「何だったのでしょうか」
「恋です」
彼は熱い声でそう述べた。
「それが恋だと知った時僕は決意しました。貴女を私の永遠の恋の相手としたいと」
「そのようなこと」
しかしヴィオレッタはそれを拒んだ。目を閉じ顔を伏せて首を横に振った。
「私は愛を知らない女」
「まさか」
「夜の世界に愛なぞございません。あるのはただ虚飾のみ」
「いえ、それは違います」
だがアルフレードはそれを否定した。
「人ならば。愛があります」
「それは朝の世界にだけ」
「僕は朝の世界で貴女を見たのです。貴女は夜の世界にだけいるのではありません」
「けれど」
「私の様な者は。貴方には」
「いえ、僕には貴女しかいません」
アルフレードも引き下がろうとはしなかった。
「ですから是非」
「私は」
それでもヴィオレッタは拒もうとする。だがアルフレードは引き下がろうとせずその手を掴もうとした。だがここで誰かが部屋に入って来た。
「マダム」
「！？」
それはガストーネであった。舞踏の場にヴィオレッタを呼びに来たのだ。

「どうされたのですか。アルフレード君も」
「いえ、ちょっと」
アルフレードはその場を慌てて取り繕うとする。だが慣れていないせいか不自然であった。しかしヴィオレッタのそれはごく自然なものであった。
「少しお話を」
「何のことで」
「この前のオペラ座のことで。確かワーグナーという若い作曲家の作品でしたね」
「タンホイザーでしょうか」
「はい」
ヴィオレッタはガストーネの言葉に頷いた。
「あれはよかったですな。かなり斬新で」
「けれど不評だったそうですが」
「芸術がわからない輩も多いのです。気にしてはいられません」
「そうだったのですか」
「あの作品は歴史に残るかも知れませんぞ。あの若い作曲家も」
「ワーグナーも」
「ええ。どうやらかなり女癖が悪く浪費家でしかも尊大な人物らしいですが。それでも作品は大したものです」
実際にワーグナーの人間性はお世辞にも褒められたものではなかった。よく反ユダヤ主義を批判されるがそれ以外にも非常に問題の多い人物であったのだ。
「面白そうな方ですね」
「身近にいて欲しいタイプではないですが。まあそうかも知れませんね」
「一度見てみたいですわね」
「ワーグナーの方をですか？それとも彼のタンホイザーを」
「両方を」
彼女はにこやかに笑ってそう言った。

「その時は何方かと」
「エスコートさせて頂きますが」
「喜んで」
「有り難うございます。ではその時に」
「はい」
ガストーネは一礼した。そしてまたヴィオレッタに対して言った。
「マダム、ダンスはどうされますか」
「今日は少し」
青い顔で言った。
「申し訳ありませんが」
「仕方ありませんね。それでは」
「はい」
こうしてガストーネは部屋から去った。そしてまたヴィオレッタとアルフレードだけになった。
「御覧になされましたか」
今の自分とガストーネのやりとりをアルフレードに見せたうえで声をかけてきた。
「今のが私なのです」
そしてこう言った。
「おわかりになられましたでしょうか」
「しかし」
「とりあえず恋のお話はこれで。宜しいでしょうか」
「ですが」
「ですがもなく。私にはそうしたものは縁がありませんから」
「それでも」
「仕方のない方ですね」
根負けしたのか薄い苦笑の後少し溜息を漏らしてこう言った。
「わかりました。ではまた御会いしましょう」
「それは何時でしょうか」
「はい」

ヴィオレッタはそれに応えるかのように自分の胸に手をやった。
そしてその椿を取った。それをアルフレードに対して手渡した。

第一幕その六

「これを」
「椿を」
彼はその手の中に渡された赤い椿を見た。
「はい。その椿がしおれた時に」
「また御会いして宜しいのでしょうか」
「はい」
ヴィオレッタはにこやかに笑ってそう答えた。
「御会いしましょう」
「有り難うございます」
彼は喜びを身体全体に現わしてそう言った。
「何と幸福なことか」
「それで御聞きしたいのですが」
「はい」
アルフレードはヴィオレッタにまた顔を向けた。
「まだ私を好きだと言えますか？」
「勿論です」
彼は迷わずそう答えた。
「何度でも申し上げます。そして何時までもお慕い申し上げます」
「まさか」
「僕は本気です」
「一時の戯れでは」
そう言いながら横目でアルフレードを見る。だが彼は真剣なままであった。
「先程も申し上げましたが嘘は申しません」
「では」
「はい。僕の心は貴女のものです」
「気の迷いではなくて」

「勿論です。この言葉に偽りはありません」
「左様ですか」
しかし彼女はそれを信じた様子はなかった。だがアルフレードはそれには気付かなかった。ヴィオレッタから椿の花を贈られてそれだけで気持ちが一杯であったのだ。
「マダム」
「はい」
アルフレードは歩み寄って来た。そしてその手を受け取った。
「今はこれで。宜しいでしょうか」
「どうぞ」
ヴィオレッタは頷いた。するとアルフレードは彼女の手に近付きその手の平に接吻をした。別れの挨拶であった。
「それではこれで」
彼は顔を上げてヴィオレッタに対してそう言った。
「さようなら」
「この椿の花が教えてくれた時にまた御会いしましょう」
「それまでご機嫌よう」
「はい」
こうしてアルフレードは屋敷を後にした。彼と入れ替わるように客達がダンスホールから戻って来た。
「マダム」
「はい」
ヴィオレッタは客達に応えた。
「もうすぐ朝ですのでこれで」
「お名残惜しいですが」
「朝なのですか、もう」
「はい」
客達はヴィオレッタにそう教えた。
「朝陽が我々にそう教えてくれました」
「もう快楽の時間は過ぎ去ったのだと」

「早いものですね」
ヴィオレッタはそれを聞いて残念そうにこう言った。
「時間が過ぎ去るのは。そしてお別れの時が来るのは」
「仕方ありません」
客達はそう答えた。
「ですがまた出会いの時は訪れます」
「その時にまた御会いしましょう」
「ですね」
彼女は気を取り直した顔を作ってそれに頷いた。
「ではまた」
「はい」
こうして客達はそれぞれ帰って行った。ヴィオレッタは広い屋敷にただ一人となってしまった。
「朝が来たというのに」
彼女は物憂げな顔でそう呟いた。
「私の心は夜の世界のまま。いえ、住んでいる世界さえも」
そう言いながらゆっくりと立ち上がった。
「けれど。何故かしら」
自身の胸を見て呟く。そこにはいつもある筈のものがない。だがそれ以上のものがあるように感じられた。
「あの人の言葉が。まるで心の中に刻み込まれているよう。こんなことははじめてだわ」
心が乱れていっているのを感じていた。
「真実の恋なんて。道を踏み外し、夜の世界にいる私にとっては全く縁のないものである筈なのに。どうして今こうして私の心を捉えるの？」
自分に対して問う。だが返答はない。
「愛し、愛される」
また呟いた。
「それは私の知らないこと。喜びなのでしょうか。それとも」

自分に対して問うていた。
「怖れ。この空虚で何時終わるかわからない仮初めの人生。それがあの人によってどうなるのというの？」
その心にアルフレードが宿っているのがわかった。
「愛を知ったのかしら。この私が。娼婦の私が」
また自分自身に対して問う。
「真実の愛に。そう、あの人に教えられたのよ」
だが思い直した。俯き顔をゆっくりと横に振った。そしてまた言った。
「いいえ」
今まで自分の言っていたことが馬鹿馬鹿しいものに思えて仕方がなくなってきた。
「そんな筈はないわ。そんな筈が」
不意にそう自嘲めいてそう呟いた。
「このパリで。空虚な街で。夜の世界で。私は何を求めようとしているの？」
目を閉じ口だけで笑っていた。
「この街では、夜の世界では愛なんてないわ。あるのは快楽と享楽だけ。それに身を任せるのが私の人生なのよ」
そう今までは思っていた。そして今もそう思おうとした。
「花から花へ。飛び歩くのが私の人生。夜の花を飛び歩くのが」
だが飛び歩けなかった。胸が苦しいのではない。何故か足が動かなくなってしまったのだ。それは何故なのか。彼女にはわからなかった。
「愛」
ここで屋敷の外から声がした。ヴィオレッタはその声を聞いてハッとした。
「あの声は」
それはアルフレードのものであったのだ。だからこそ我に返ったのであった。

「愛は全ての世界に存在する」
「全ての世界に」
ヴィオレッタはそれを聞いてまた俯いた。そして考え込んだ。
「そしてこの世をあまねく支配しているんだ」
「まさか」
首を振ろうとする。だが今度はそれはできなかった。
「・・・・・・・・・・」
ヴィオレッタはそれを感じて沈黙してしまった。そこにアルフレードの声がまた聞こえてくる。
「神秘的で気高く、そして美しい。心に喜びを与えてくれるんだ」
彼はヴィオレッタに花を贈られたことで舞い上がっていただけであったかも知れない。だがその言葉でもヴィオレッタの心を打つには充分であった。
「私にも愛が」
「愛は誰にも平等に与えられるんだ」
「それじゃあ」
ヴィオレッタは顔を上げた。そして宙を見上げた。
「私も」
「愛に生きることが人生。そしてそれがこの世の全てなんだ」
「それなら」
彼女は決心した。もう迷いはなかった。
「アルフレード、貴方と」
「愛しのヴィオレッタ、この椿が告げる時に」
「永遠に結ばれましょう」
「僕は貴女のものに」
今二人の心は通い合った。そして二人はそれに従うのであった。

第二幕その一

第二幕　田舎家にて

椿の花が教える時にアルフレードはヴィオレッタの元に行った。そしてそこでヴィオレッタは彼を受け入れた。そして二人の交際がはじまったのであった。

ヴィオレッタは娼婦を止めアルフレードと二人でパリを離れた。そしてパリの郊外にある森の中に小さな家を設けそこに二人で住むようになったのであった。

庭と窓のあるささやかながら綺麗な家であった。その中から赤と薄い茶色の狩猟服を着たアルフレードが出て来た。

「夢みたいだ、本当に」

その手に持つ猟銃を見詰めながら言った。

「彼女が僕と一緒に暮らしてくれるなんて。その夢の生活がここではじまってもう三ヶ月になる」

うっとりとした様子で言う。

「パリにいた時の彼女じゃない。この静かな場所に満足してくれている彼女が僕の側にいてくれる。パリでの優雅な生活や賛辞の声よりも僕を選んでくれたんだ」

彼は今自分の幸せを心の奥底から感謝していた。

「僕の若い情熱も穏やかな微笑みで包み込んでくれている。もう過去はいらない」

今度は過去を否定した。彼女の過去を。

「今と未来さえあれば。他には何にもいらないんだ」

もう彼女のこと意外は考えられなくなってしまっていた。だがそれこそが彼の望みであったのだ。他のことには思いが浮かびはしなかった。だがそういったことについても考えなければならない時が来るものである。

「おや」

見ればヴィオレッタの召使が屋敷にやって来ていた。身軽な旅行服であった。
「君は一体」
「旦那様」
「ここ暫く姿を見掛けなかったけれど。どうしたんだい？」
「パリに行っておりまして」
彼女はそう答えた。
「パリに」
アルフレードはそれを聞いて首を傾げた。
「どうしてまたそこに」
「奥様に言われまして」
「ヴィオレッタにかい」
「はい。お金を作るようにと言われまして」
「お金を。一体何の為に？」
「ここでの生活を送る為だそうです」
「ここでの」
アルフレードはそれを聞いて考え込んだ。
「そういえばここで暮らすようになってもう三ヶ月が経つけれど」
「はい」
「僕はプロヴァンスの実家から仕送りがある。けれどヴィオレッタはそれを受け取ってはいないね」
「そうですね」
「では彼女はどうやってお金を作っていたんだい？あの仕事はもう止めてしまったし」
「ものを売って」
召使はそう答えた。
「ものを」
「はい。馬や馬車を。その他にも多くのものをお売りになって」
「何だって。まさかそうやって」
「はい。御主人様はそうやってここでの暮らしの為のお金を作られ

ていたのですよ」
「知らなかった。彼女がそうやってお金を作っていただなんて」
「御主人様に言われていまして」
「何と」
「旦那様には決して言わないようにと。そう言われていました」
「そうだったのか。それでどれだけのお金を」
「一〇〇〇程」
「それだけなんだね」
「はい」
召使はアルフレードの問いに頷いた。
「よし、それ位ならどうとでもなる」
彼はそう言って顔を引き締めさせた。
「今からパリに行ってくるよ。日が暮れるまでには戻る」
「わかりました」
「ただ内容はヴィオレッタには秘密でね。いいね」
「ええ」
「それじゃあすぐに行って来る。ヴィオレッタに宜しく言っておいてくれ」
彼はそう言い残して屋敷の中に戻ると正装になって何処かへと向かった。その行く先はもう言うまでもないことであった。
彼が出発して暫く経ってヴィオレッタが屋敷から出て来た。彼女は召使の姿を認めると家の前にある屋外用の椅子とテーブルに招き寄せた。樫の木で出来ていた。
「お金はどうなったかしら」
「今作って参りました」
「そう。御苦労様」
ヴィオレッタはそれを聞いて満足そうに頷いた。
「それでアルフレードは？急に姿が見えなくあったけれど」
「旦那様がパリに向かわれました」
「あら、パリに」

ヴィオレッタはそれを聞いて意外そうな声をあげた。
「また珍しいわね。どういう風の吹き回しかしら」
「そこまでは存じませんが」
彼女はアルフレードとの約束を守りそう言って誤魔化した。
「日が暮れる前には帰られるということですので。御安心下さい」
「そうなの」
「はい。後は」
「すいません」
そこで小奇麗な身なりの男が二人のところへやって来た。

第二幕その二

「ヴィオレッタ＝ヴァレリーさんの別荘はこちらでしょうか」
「別荘ではありませんが」
ヴィオレッタはその男に答えてゆっくりと立ち上がった。
「今はここに正式に住んでおりますので」
「そうだったのですか」
「そして何か」
「いえ」
男は畏まってから応えた。
「まずはお手紙を。先程ポストに入っておりました」
「有り難うございます。何通でしょうか」
「二通程」
「どんなものでしょうか」
「詳しくはこちらに」
「はい」
ヴィオレッタはそれを受け取った。そしてまずは上の手紙を読みはじめた。
「あら」
ヴィオレッタはそれを見て明るい声をあげた。
「どうされたのですか」
「フローラからの手紙よ」
ヴィオレッタは嬉しそうに召使に対してそう述べた。
「私の新しい家を見つけたから。今晩の舞踏会に誘って来ているのよ」
「どうされますか？」
「気持ちは有り難いのだけれど」
彼女は目を閉じて口元に笑みを浮かべながら首を横に振った。
「今はね。そうしたことには興味がなくなったのよ」

「左様でございますか」
「今はここでアルフレードと二人で暮らしていることが。何よりも幸せだから」
「わかりました。それでは」
「ええ。お断りするわ」
「そしてもう一通ですが」
男がここで声をかけてきた。
「これね」
「はい」
「何なのかしら」
ヴィオレッタは呟きながら手紙の封を切った。そして読みはじめた。
「あら」
「どうされたのですか？」
召使がまたヴィオレッタに対して問うた。
「今日来られるのね」
「どなたがでしょうか」
「お待ちしていた方よ」
ヴィオレッタは彼女に対してそう答えた。
「やっと来られるのね。それは何時かしら」
「もう少しかかります」
男がそれに応えた。
「もう少しなの」
「はい。旦那様は歩いて来られていますので」
彼はそう言った。
「執事である私は先に馬で来ましたが。もう少しお待ち下さい」
「わかりました。それでは待たせて頂きます」
「はい」
男はそれを聞いてその場を後にした。ヴィオレッタは召使も下がらせその場に一人となった。そして椅子の上に座り込んだ。白い服

が樫の木の褐色の上に映える。それはまるで白い椿の様であった。
「あの」
初老の男の声がした。
「はい」
ヴィオレッタはそれを受けて声をあげた。
「どなたでしょうか」
そうは言いながらも誰なのかは内心わかってはいた。だがあえてこう言ったのである。
「どうも」
見れば品のいい紳士であった。清潔な正装で服装を整えている。その色はシックに黒で統一されている。そしてシャツは白であった。見ればネクタイも地味な色であり黒い靴も油が塗られている。
そしてシルクハットの下の顔は丸眼鏡をかけ、白い顎鬚と口髭を短く切り揃えている。その顔は何処かアルフレードを思わせるものがあったが顔立ちは彼よりさらに理知的な趣があった。
「こんにちは」
彼はシルクハットを脱ぎヴィオレッタに対して挨拶をした。見れば白い頭はもう髪の毛がかなり薄くなっていた。
「ヴィオレッタ＝ヴァレリーさんですね」
男は彼女にそう尋ねてきた。
「はい」
ヴィオレッタはそれに頷いた。それからまた尋ねた。
「貴方は」
「私はジェルモンと申します」
「ジェルモン」
ヴィオレッタはその名を聞いてその整った顔を強張らせた。
「まさか貴方は」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「私はアルフレードの父でございます」

「そうでしたか」
沈痛な顔になった。だが態度までは崩さない。冷静さを何とか保ちながら彼を向かい合った。
「そして今日は一体どのような事情でこちらに」
「息子のことで」
彼はヴィオレッタを見据えながらそう言った。
「あれは世間知らずな男でして」
「そうなのですか」
「詰まらない女に惑わされ、道を踏み外そうとしている。嘆かわしいことです」
「そえは誰のことでしょうか」
その整った眉を顰めさせて彼に問うた。
「あえて申しますまい」
「お話はそれだけですか」
キッとしてそう問う。
「それでしたらもうお話することはありませんが」
「いえ、私の方はあります」
ジェルモンは引き下がることなくそう言い返した。

第二幕その三

「アルフレードの為にも」
「彼の為にもですか」
「そう。本当に愚かな男でして。自分の財産をその怪しげな女に貢ごうとしていると聞いては。放ってはおけません」
「あの方からはそのようなものを受け取ってはおりません」
「一切ですか」
「一切です」
毅然としてそう返す。
「そうですか」
彼は一端目を閉じた。そしてまた開いてこう言った。
「果たしてその御言葉が信じられるでしょうか」
「私が信用できないと」
「あえて言わせて頂きましょう」
彼は臆するところがなかった。
「貴女の様な立場の方を信用するというのは。無理があるのではないでしょうか」
「失礼な」
「失礼かどうかという問題ではありません」
ジェルモンはなおも言った。
「それが貴女達の仕事なのですから。違いますか」
「確かに私の前の仕事はそうでした」
顔を俯け苦しそうにそう言った。
「ですが今の私は。あの仕事は止めました」
「では何故」
彼は尚も問うた。
「これだけの立派な邸宅が」
後ろにある邸宅を見ながらそう言う。確かに小さいながらも綺麗

にまとまった邸宅であった。
「信用なされないのですね」
「それは無理というものです」
「わかりました」
彼女は覚悟を決めた。そしてジェルモンを見据えてこう言った。
そして家の玄関の前の鈴を鳴らした。すぐにあの召使がやって来た。
「何か」
「あれを持って来てくれるかしら」
彼女に顔を向けてこう言った。
「あれを」
「すぐにね」
「わかりました」
彼女は一旦姿を消した。そして暫くして何かの封筒を持って戻って来た。
「どうぞ」
「有り難う」
彼女を下がらせた。そしてあらためてジェルモンと向かい合った。
「これを」
そう言ってその封筒をジェルモンに差し出す。
「これは」
「そこに私の誠意があります」
彼女はそう言った。
「私の誠意が」
「誠意ですか」
言葉には含ませなかったもののそこには何処かシニカルな色合いがあった。
「そのようなものが」
「御覧になって下さい」
ヴィオレッタは多くは言わなかった。そう述べただけであった。
「是非共」

「わかりました」
この時までジェルモンは彼女を全く信用してはいなかった。これは彼が特に偏見を持った人物だからなのではない。あくまで世間の常識というものに沿った考えで述べているだけであったのだ。
封筒を開けた。そしてその中にあるものに目を通す。それを見るうちに彼の顔がそれまでの落ち着いた、だが冷たいものから驚愕のそれに一変していった。
「これは一体・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「貴女はまさか」
ヴィオレッタは答えようとはしない。それが何よりの答えであった。
「何故そこまでして」
「愛故です」
彼女は沈痛な顔でそう言った。
「私の過去のことも確かにあります」
「・・・・・・・・・・」
「ですが今は。彼の為に全てを捧げたいのです」
「しかしそれでは」
「構いません」
目を閉じ首を横に振った。
「過去の愛を知らず、束の間の宴にのみ生きていた私に愛を教えてくれた方なのですから。何を迷うことがありましょう」
「そうなのですか」
「おわかりになって頂けたでしょうか」
「充分です」
封筒の中に書類を入れた。そしてテーブルの上にそれを置いてからまた言った。
「ですが私はそれでも」
「わかっております」

その目に全てを悟った諦めの色が浮かんだ。
「それも私には感じられていました」
「そうだったのですか」
「私の様な者には。愛という幸福は」
「そのうえでお話したいのです」
ジェルモンもまた沈痛な顔になっていた。言いたくはなかったがどうしても言わずにはいられなかったのだ。
「アルフレードのことと」
「はい」
「その妹のことで」
「妹、彼に」
「神は私に二人の子供を与えて下さいました。一人はアルフレード、そしてもう一人は」
「娘さんですね」
「そうです。私にとってはかえがえのない存在です」
彼は静かに言葉を選びながらそう言った。
「もうすぐ他の者の妻となります。ですがその時に」
「アルフレードのことが噂になれば」
「おわかりでしょう。ですから」
「わかりました」
ヴィオレッタは静かに頷いた。
「それでは暫くの間」
彼女は苦渋の決断を下した。
「アルフレードから」
「いえ」
だがジェルモンはまだ言った。
「私がお願いしているのはそんなことではありません」
「まさか」
それを聞いたヴィオレッタの顔色が一変した。
「貴方はまさかそれを私に」

「はい」
ジェルモンは頷いた。
「お願いできますか」
「何と恐ろしいことを」
彼女はそう言ってそれを拒絶しようとした。
「私が彼をどれだけ思っているのか。御存知になられた筈です」
「それでもです」
彼は言った。
「私にはあの人だけしかいないのです」
彼女は必死にそれを拒もうとする。
「あの人が私にとってはもう全てだというのに」
「それでもです」
ジェルモンも引き下がることはなかった。
「私はもう長くはないのです」
「それもわかります」
ジェルモンは答えた。
「そのお顔を見れば」
「やはり」
「胸を患っていられますね」
「はい」
ヴィオレッタはそれを認めた。
「もう長い間。立つのも辛い程に」
「やはり」
「血こそ吐きはしませんが。次第に命の灯が弱くなっていくのがわかります」
結核であった。この時代は死の病であった。ヴィオレッタの胸の病はこれだったのである。だからこそ彼女はアルフレードに全てを捧げようとしていたのだ。

第二幕その四

「その残り僅かな私の命を彼に捧げようというのに」
「犠牲は大きいのもわかっています」
ジェルモンの顔も次第に苦しいものとなってきた。
「ですが」
「アルフレードのことですか」
「はい」
彼は息子のことであることも認めた。
「あれはまだ若いのです」
「しかし」
「息子のこれからのことも」
彼はやはり父親であった。父親とは世界の権威、それも良識という存在の権威であるのだ。そうでなければならない。そしてジェルモンはその化身として今ヴィオレッタの前に立っていたのであった。
「今はいいでしょう」
彼はその良識と分別のうえに立って話をはじめた。
「ですが時が過ぎ去ったならば」
「それは」
ヴィオレッタはそれを拒絶しようとする。だがジェルモンはそれを許そうとはしない。
「甘い感情も過去のものとなり。そして」
「それ以上は」
「おわかりになられたでしょう。でしたら」
「それでも」
ヴィオレッタはアルフレードと別れたくはなかった。
「私はこれからもアルフレードと」
「それが出来ないのです」
ジェルモンはあくまでこの世界の良識という観点から言った。

「本当に。おわかりになられませんか」
「私の過去は消えないのでしょうか」
「はい」
　このうえなく冷酷な言葉であった。彼女にとってこれ程冷たい言葉があったであろうか。
「残念ながら」
「ああ！」
「私の息子と娘の為に」
「死ねというのですか！」
「そうではありません」
「けれどそれは同じことです！」
「神がそう申されているのです」
「では神も私を」
　彼女もまた神を信じていた。その神の言葉だと聞かされた時ヴィオレッタの目の前はさらに暗くなってしまった。絶望の暗闇であった。
「私を許しては下さらないというのでしょうか」
「そういうことになります」
　ジェルモンも言いたくはなかった。だが彼はアルフレードとその妹、すなわち子供達の為にあえてこう言ったのである。
「ですが貴女は二人にとって天使となります」
「何故」
「二人を救われるからです。貴女が身を引かれることによって」
「私が身を引くことによって」
「はい」
「それしかないのですか」
「さっきから申し上げている通りです」
　ヴィオレッタはこらえていた。目の前の暗黒が全てを覆うのに耐えることに。だがそれでも決断をしなければならなかったのだ。それもわかっていた。

「さあ」
「・・・・・・わかりました」
心の奥底から搾り出すようにしてこう言った。
「アルフレードに伝えて下さい」
「宜しいのですね」
「ええ」
蒼白になりながらもこう述べた。
「そしてお嬢様に」
「わかりました」
「幸福と共に不幸があるということを」
「宜しいのですね」
「私の様な者には」
泣きそうになるがそれは必死に堪えていた。泣くわけにはいかなかったのだ。
「こうなるしかなかったのでしょう」
「仕方のないことなのです」
ジェルモンはまた言った。
「この世の中というものの創りがそうなのですから」
「今程それを恨めしいと思ったことはありません」
目を閉じ、首を横に振ってこう言う。
「けれど道を踏み外してしまった者には。夜の世界の者には。所詮愛なぞというものは適わぬものなのでしょう」
そう思うしかなかった。そう思わないと心が壊れそうであったのだ。ヴィオレッタも一人の女性であった。
「では彼には」
「はい」
「何をすればよいでしょうか」
「愛していないと仰れば」
「それは駄目です」
首を横に振ってそれは否定した。

「あの人は信じはしないです」
「ではここを去られれば」
「それもまた」
これもまた否定した。
「彼は私を探すでしょう」
「ではどうすれば」
「私に考えがあります」
沈んだ声で言った。
「これでしたら」
「では貴女にお任せします」
「有り難うございます」
ジェルモンも辛かった。心が潰れそうであった。しかし子供達への想いが彼を支えていたのであった。こうした意味で今二人は互いに愛を争わせていたのだ。そしてジェルモンが勝った。彼だけならばこうはならなかったであろう。しかし彼は子供達の為にあえて鬼となっていたのであった。全てを犠牲にする哀しい鬼であった。
「けれどあの人は私を恨まれるでしょう」
「アルフレードが」
「はい。人とはそういうものです」
彼女は言った。
「何も告げないで去られると。疑いが生じますから」
「あれには私が伝えておきましょう」
「宜しいのですか？」
「せめてこれ位は」
彼は自分の言っていることもしようとしていることもわかっていた。だからこそこの役を買って出たのだ。また出ずにはいられなかったのだ。
「私の役目です」
「有り難うございます。けれど」
それでもヴィオレッタの顔は晴れはしなかった。

「私はもう」
「貴女には何と申し上げてよいかわかりませんが」
ジェルモンは言った。
「またよいことが。神がおられる限り」
「神ですか」
ヴィオレッタは神の名を聞いてまた哀しい顔になった。
「神は私の様な者を救われはしません」
「それは」
だがジェルモンにこれを否定することはできなかった。キリスト教の世界において夜の世界とは忌むべきものである。彼が今ここに来たのもヴィオレッタが夜の世界の住人だからである。神は昼の世界にこそ存在しているのである。夜の世界には存在してはいない。
「ですが貴方だけには知って頂きたいのです」
「このことをですか」
「はい。アルフレードの為に、そしてあの人の為に身を引いたことを」
「わかりました」
「私はあの人の為に生きてきたということを」
「わかりました」
ジェルモンはまた頷いた。
「本当に。何と申し上げてよいか」
「これが私の運命なのですから」
ヴィオレッタはもう達観していた。
「夜の世界の中でしか生きられない。そして夜の中に死ぬ。それが私の運命なのです」
「夜ですか」
「一旦入ると出ることはかなわない世界です」
目を伏せて言う。
「絶対に。今それがわかりました」
「申し訳ありません」

「貴方が謝れられることはありません」
それはわかっていた。おそらく昼の世界にいる者なら皆こうしたであろうからだ。夜の世界の住人ではない。神のいる世界にいるのだから。

第二幕その五

「誰でも」
「では」
「はい。さようなら」
これはジェルモンにだけ言ったのではなかった。無論アルフレードにだけ言ったのでもない。彼女が見出した安住の地、そして昼の世界、未来にも告げたのであった。
「永遠に」
「お元気で」
「はい」
二人は別れた。ジェルモンは帰って行く。
「暫くこの辺りにおります」
「何故でしょうか」
「あれに伝えなければならないでしょう」
「あっ」
そうであった。アルフレードには伝えておかなければならないのだ。
「貴女が去った後で。伝えておきます」
「かたじけないです」
「いいのです。私はこの為に来たのですから」
最初の偏見はもうなかった。昼の世界の住人としての偏見はもうなかった。だがそれでも彼は護らなければならないものがあったのだ。それに逆らうことはできなかった。
「それでは」
「はい」
ジェルモンは姿を消した。ヴィオレッタはそれを見届けた後で屋敷の中に戻った。それから暫くして召使を連れて玄関に姿を現わした。

「それじゃあお願いね」
「はい」
召使は彼女に対して頷いた。
「けれど・・・・・・宜しいのですか？」
「いいの」
ヴィオレッタは力のない笑みを浮かべながらそう言った。
「この手紙を送られたならば」
「もう決めたのよ」
召使の言葉を振り払うようにして言う。
「だから・・・・・・貴女はもう気にしないで」
「わかりました。それでは」
「お願いね」
「はい」
召使は出ようとする。その手には一通の手紙がある。だがここでアルフレードの姿が見えた。
「只今」
「アルフレード」
ヴィオレッタは彼の姿を認めて驚きの声をあげた。
「早かったのね」
「用事が早く終わってね」
彼はそう答えた。
「君にもいい話だと思うよ。それはすぐにわかるよ」
「そうなの」
「うん。ところでどうしたんだい？」
「何が？」
「いや、顔が随分青いからさ。気分でも悪いの？」
「ええ、それは」
それを言われて内心かなり狼狽した。気付かれたのでは、とも思った。だがそれはあえて隠したうえで答えた。
「ちょっと。風邪をひいたらしくて」

「頭が痛いのかい」
「いえ、それはないけれど」
どうやら気付いた様子はない。それに安堵しつつ演技を続ける。
「何か。身体がだるくて」
「それはいけないね」
アルフレードは何も疑わずこう声をかけてきた。
「じゃあ休んだ方がいいよ」
「有り難う。けれど今は」
「何か事情があるようだけれど無理はしないでくれ」
心配して気遣う。
「君が病気になれば僕も心が塞ぐ。君は僕の全てなんだから」
「私が」
ヴィオレッタはそれを聞いてアルフレードの顔をみやった。
「貴方の全てなのね」
「そうさ。最初に会った時からそうだった。だから無理はしないでくれ、いいね」
「ええ、有り難う」
心の奥底から嬉しかった。だがそれでももうしなければならなかったのだ。それが彼女の心を一層締め付けた。
「ところで一つ話しておきたいことがあるんだ」
「何かしら」
「この前僕に一通の手紙が来たよね」
「少し前のあれかしら」
そう言えば思い当たるふしがあった。
「そう、それなんだけれど」
「何の手紙だったのかしら」
「僕の父からの手紙でね」
「御父様の！？」
「！？」
ヴィオレッタが突然驚きの声をあげたのでアルフレードは怪訝そ

うな顔をした。
「どうしたの？」
「えっ！？」
「そんなに驚いて。確か僕の父のことは何も知らない筈だけれど」
「ま、まあそうだけれど」
ヴィオレッタはまた誤魔化した。誤魔化さねば成らない自分自身が嫌であった。
「それでどんな内容だったのかしら」
「手紙のこと？」
「ええ。何て書いてあったのかしら」
「君との交際のことだよ」
「そうだったの」
内容はわかった。もう聞くまでもないことであった。
「随分と厳しいことが書いてあったよ。けれど気にすることはないよ」
「どうしてかしら」
「父はわかっていないんだ、君のことを」
彼はかなり楽天的であった。
「けれど一度会ったら変わると思うよ」
「一度会ったら」
「そうさ、きっとね」
彼は甘かった。若さ故の甘さであった。だがそれには気付かない。若さ故に。
「アルフレード」
ヴィオレッタはそんな彼に対して言った。
「何だい？」
「いえ」
言おうとしたが止めた。
「実はね」
だがそれでも言おうとする。

「うん。どうしたんだい？」
「少しここを離れたいのだけれど」
やっと言えたがそれは誤魔化しの言葉であった。

第二幕その六

「いいよ。何処へ？」
「少しね。それじゃあ」
アルフレードを見た。一瞬であったが確かに見た。二度と忘れないように。
「さようなら」
そう言ってそこから去った。そしてそこから永遠に姿を消したのであった。
「どうしたんだろう」
アルフレードは首を傾げながらもそれが何故かよくわからなかった。
「あんなに悲しそうに。悲しむ理由なんてないのに」
やはり彼は何もわかってはいなかった。これは時として勇気になる。無知故の勇気だ。
「まあいいか。少し休もう」
そう言ってそこにあるテーブルに座った。そして本を読みはじめた。読みながら父も待つことにしたのだ。
ふと思うところがあって懐から懐中時計を取り出す。見ればもういい時間であった。
「今日はもう来ないのかな」
時間を見ながらそう呟いた。
「まあいいか。明日もあるし」
ここで誰かがやって来るのが見えた。庭の方だった。
「？あれかな」
アルフレードはそれが父であるかと思った。だがここで別の方向から声がした。
「こんにちは」
「はい」

彼は立ち上がってそちらに声を送った。
「アルフレード＝ジェルモンさんはおられますか？」
「僕ですけれど」
それに応えながら玄関の方に歩いて行く。
「どうしたのですか？」
「郵便です」
見れば郵便職員であった。彼に一通の手紙を差し出していた。
「これを」
「これは」
「先程頂いたのですよ。とある貴婦人から。丁度馬車をお乗りになっておられまして」
「馬車で」
「ええ。パリに向かわれる途中でした。そこで御会いして頼まれたのですよ」
「また運がいいね」
「おかげさまで。チップも貰いましたし」
「それは何より。じゃあ僕も」
彼もそれに感じるところがあって懐から財布を取り出した。そして金貨を彼に渡した。
「少ないけれどこれを」
「有り難うございます」
彼はそれを受け取って満足そうに頷いた。
「それではこれで」
「うん」
郵便局員は立ち去った。アルフレードはあらためてテーブルの側の椅子に座り手紙の封を切った。まずは名前を見た。
「！？」
何とそれはヴィオレッタからの手紙であった。彼はまずそれをいぶかしんだ。
「どうして彼女から」

今さっきまで共にいたというのに。それがどうしてなのか不思議で仕方なかった。
読みはじめる。最初は何が書いてあるのかわからなかった。だが次第に理解できてきた。
「な・・・・・・」
それは別れの手紙であった。読んでいるうちに驚愕の色が身体全体を覆った。アルフレードはその絶望に耐え切れずまたしても立ち上がった。
「嘘だ、そんな・・・・・・」
蒼白となり呻く。だが手紙に書いてあることは変わらない。それが彼の心をさらに乱した。
「ヴィオレッタが僕を。そんな・・・・・・」
ここで玄関にまた誰かが姿を現わした。それはすっとアルフレードの方にやって来た。
「アルフレード」
「お父さん」
見ればそれはジェルモンであった。アルフレードは父に顔を向けた。
「来られていたんですか」
「御前のことが気になってな」
彼は沈痛な顔でそう答えた。
「御前に何が起こったのかはわかっている」
彼は優しい声で息子に対してこう言った。
「だからこそ聞いて欲しい。いいか」
「僕にかい？」
「そうだ」
彼は言った。
「御前はパリに出るまでずっと私達と一緒にいた。故郷のプロヴァンスに」
「うん」

彼は椅子に座った。そして落胆したまま父の話を聞く。
「それは覚えているだろうか。あの優しい海と陸を」
「忘れる筈ないじゃないか」
彼は弱い声で父にそう述べた。
「今までずっと住んでいたのに」
「そうだろう。ではあの太陽も覚えているな」
「うん」
アルフレードはまた頷いた。
「あのプロヴァンスにこそ御前の居場所があるのだよ。あの地こそが御前の安住の地なんだ」
「パリじゃなくて」
「そう。そしてここでもない」
彼ははっきりと言った。
「ここにいては御前も道に迷うところだった。だがそうはならなかった」
「お父さんのせいで？」
「違う」
それには首を横に振った。
「神の御導きなんだ。全ては」
「僕は神により今の仕打ちを受けているんだね」
「何故そんなことを言う。御前がパリに出た時から我が家は変わった」
「そうだったの」
声にはもう魂が宿ってはいなかった。虚ろな声となっていた。
「家は悲しみに閉ざされた。そして御前の話を聞く度に私は辛かった。心配でならなかったのだ」
「そしてここまで来たんだね」
「来てよかった。御前は救われたんだ」
「どうしてそんなことが言えるのさ」
彼は首を横に振ってこう言った。

「僕は。全てを失ったというのに」
「御前は何も失ってはいない」
これは慰めではなかった。真実であった。
「全てを失ってしまった人は別にいる。その人は御前の為に犠牲になったのだよ」
「嘘だ」
彼はそれを否定した。
「そんな筈がない。そんな筈が」
「いや、本当のことなのだよ」
この上なく優しい声であった。顔も。それは息子を愛する父親のものであった。
「全ては。そして御前は」
「僕は認めない」
そう言ってまた首を横に振った。
「こんなこと。認められる筈がないじゃないか」
「何を言っているんだ」
ジェルモンは立ち上がったアルフレードに対して言った。
「聞き分けられないか。私の言葉が」
「お父さんの言葉じゃないんだ」
彼は父の言葉とは別のことを見ていたのだ。
「ヴィオレッタが何処に行ったのかはもうわかっているんだ」
彼女のことはわかっているつもりであった。何もわかっていなくてもわかっているつもりであったのだ。
「パリなんだね、そこの夜会にいるんだね」
夜の世界の女は必ずそこにいる。一度そこに顔を出したならばわかることであった。
「何を考えているんだ、アルフレード」
彼は息子に対して問うた。
「決まっている、行ってやるんだ」
彼はそう言って玄関に向かった。

「見ていろ、この侮辱」
怒りで身体を震わせながら言う。
「必ず晴らしてやる！」
「あっ、待つんだ！」
だが父の制止は間に合わなかった。アルフレードは馬に乗りパリに向かった。道はもう暗くなりはじめていた。夜の世界が訪れようとしていたのであった。

第三幕その一

第三幕　夜会

パリの夜は長い。そして華やかである。それはかつて貴族達が繁栄を謳歌していた頃からであり今もそうであった。それはこのフローラの屋敷においてもそうであった。

みらびやかな屋敷であった。豪華な色とりどりの装飾が部屋や廊下を飾り宴の部屋は天井に豪奢なシャンデリラがあった。そしてその周りには天使達の絵が描かれている。その何処か中性的な顔で下を見下ろしている。まるで宴を見守るかのように。

壁にもまた絵が描かれていた。それは宴を謳歌するローマ貴族達の絵であった。寝そべり、風変わりな食べ物を口にする貴族達。彼等は今の宴を当時のローマ貴族達になぞらえているのであろうか。

確かにそこには繁栄があった。楽しく、優雅であった。

だが同時に空虚であった。何時終わるかわからない宴。それが夜の世界の宴であったのだ。

それを現わすかのようにこの宴の間には賭博用のテーブルが存在した。そこにはカードが置かれている。その隣には食事や酒が置かれたテーブルがある。食事自体は軽食がメインであったが酒は多かった。これがこの宴の性格を如実に現わしていた。そこに正装した紳士淑女達がいた。彼等はそれぞれ宴を楽しんでいた。まるで花に集まる蜂や蝶の様に。

「皆さん」

屋敷の主であるフローラが言った。

「楽しんで頂いているでしょうか」

「勿論です」

彼等は皆そう答えた。

「今宵は尽きることのない憂いを晴らしましょう。そして束の間の楽しみを」

「永遠のものとしましょう」
それにガストーネが応えた。
「ええ」
客達はそれに頷いた。そしてフローラは宴の中に入って行った。
「ところで」
「はい」
フローラはガストーネの言葉に顔を向けた。
「今宵の宴にヴィオレッタとアルフレードを招待したそうですが」
「ええ、それが何か」
「これは聞いた話ですが」
ガストーネはそう前置きをしたうえで言った。
「あの二人は別れたそうです」
「まさか」
だがフローラはそれを聞いても信じようとはしなかった。
「昨日二人の家に言ったのですけれど」
側にいた客の一人が言った。
「物凄く仲がよかったですよ。はたから見ても羨ましい程」
「あくまで聞いた話ですが」
「しかし」
それでも彼等は何か信じ難かった。
「あの二人に限って」
「まあそれはすぐわかることでしょう」
ガストーネはこう言った。彼等の後ろでは催しがはじまっていた。
「星に願いを計れば」
ジプシーに扮した若い娘達が歌いながら踊っていた。
「どんなことでもわかりましょう。未来も何もかも」
「そう、未来ですな」
ガストーネはそのジプシーの歌に応えるかのように言った。
「もうすぐわかる未来です、全ては」
「それはそうですが」

「全てはヴェールに覆われていても」
ジプシー達の歌は続いていた。
「神は全てを御存知なのです」
そう歌いながらその場から去って行く。そして後から今度は闘牛士が姿を現わした。
「ほう、マタドールですか」
「ええ」
フローラはガストーネの言葉ににこりと笑って頷いた。
「趣きを変えまして」
「我等ははるばるマドリードから来ました」
「何の為に」
客達は歌い踊るマタドール達に対して問うた。
「騒ぎを楽しむ為に。パリは素晴らしいところと聞きましたので」
「確かにその通りです」
彼等はそれを認めた。
「その楽しさに心打たれてお話したいことがあります」
「それは一体」
「我々の恋のことです。我々は今まで恋をしてきました」
「どのような恋を」
「スペインの情熱的な娘達を。この娘達は言ったのです」
「何と」
「一日で五頭の牛を倒して欲しいと。もしそれができたならば妻になると」
「それはまた凄いお話で」
「そして我々はやりました。それぞれ一日で五頭の牛を倒しました。そして娘達を妻としました」
「それは素晴らしい」
素直に賛辞の言葉を贈った。
「それが闘牛士なのか」
「そう、闘牛士は愛と戦いを好むもの」

彼等はそう歌った。
「他にも楽しむものがあります」
「それは何ですかな」
「酒です」
彼等はニコリと笑ってこう言った。
「そしてカードを。これから如何でしょうか」
「是非共」
客達はそれに頷いた。
「それでは御一緒に」
「はい」
こうして客達はマタドール達と共にカードと酒に入って行った。先程のジプシー達も出て来てそれに加わる。正装の紳士や淑女と風変わりだがみらびやかな服の者達が混ざり合う。そして彼等は共に楽しむのであった。

第三幕その二

「宴もたけなわですな」
「ええ」
フローラはガストーネの言葉に頷いた。
「後はヴィオレッタとアルフレードですね」
「二人で来ますよ」
「さて」
だがガストーネはそれには懐疑的だった。悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「それはどうでしょうか」
「なら賭けますか？」
「いいですね」
ガストーネはそれに乗ってきた。
「では賭けるのは金貨一枚」
「宜しいのですね」
フローラはガストーネが財布から取り出したその金貨を見ながら問うた。
「はい、それでは」
「賭けましょう」
こうして二人は賭けることになった。程なくして使用人の一人がフローラのもとにやって来た。
「アルフレード様が来られました」
「ヴィオレッタも一緒ね」
彼女は自信があった。そうに違いないと思っていたのだ。
「いえ」
だが彼女は首を横に振った。
「残念ながら。御一人です」
「そうなの」

彼女はそれを聞いて驚きを隠せなかった。
「それじゃあ」
「私の勝ちですね」
ガストーネは話を聞き終えた後でフローラに対してこう言った。
「ではお約束の」
「ええ」
フローラは頷いた。そして金貨を一枚取り出し彼の手に渡した。
「どうぞ」
「有り難うございます」
ガストーネは受け取った後で部屋の入口に顔をやった。フローラもそれは同じであった。やがて正装したアルフレードが姿を現わした。
「ようこそ」
「はい」
アルフレードはフローラ達に対して挨拶をした。
「あの」
「何でしょうか」
彼にフローラが声をかけてきた。
「ヴィオレッタは」
「さて」
そう言ってとぼけてきた。
「知りませんが」
「知らないとは」
フローラはその言葉がとても信じられなかった。
「そんな筈が」
「そのうち来るでしょうね」
まるで他人事のように返す。
「その時に挨拶をされるとよいでしょう。まあ今はカードに興じたいのですが」
「そういうことでしたら」

ガストーネはそれを聞いて楽しそうに声をあげた。
「お相手致しますぞ。何が宜しいですかな」
「ポーカーを」
彼は表情を変えることなくそう答えた。
「それでどうでしょうか」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうして彼はカードのテーブルに向かった。そしてガストーネ達と共にポーカーをはじめたのであった。
「一体どういうことなのかしら」
フローラは何食わぬ顔でポーカーをするアルフレードを見ながらこう呟いた。
「やっぱり何かあったのかしら」
「そう思うしかないようですね」
客の一人がそれに頷く。
「別れたのでしょう、おそらく」
「何故」
フローラはそれを否定したかった。だからこう言った。
「あんなに仲睦まじかったというのに」
「人の関係なぞわからないものなのです」
その客人はフローラに対してそう答えた。
「人の心は風の中の羽根のようなもの」
「しかし」
「しかしでもです。移ろい易いものであることは貴女も御存知でしょう」
「確かにそうですが」
「それならばおわかりの筈です。よくね」
「はい」
頷くしかなかった。
「それよりも彼女も招いたのですよね」

「ええ」
フローラはそれを認めた。
「こんなことになっているとは思いもしませんでしたから」
「大変なことになりますよ」
客人はそう囁いた。
「何とかそれを避けないと」
「どうしましょう」
「まずはアルフレードに注意することです」
「アルフレードですか」
「ヴィオレッタはわきまえた方ですが」
彼はヴィオレッタのことをよく知っていた。そしてアルフレードのことも。
「彼はまだ若い。ああ見えて激情家でもあります」
「そうだったのですか。それじゃあ」
「そうです。とにかく彼には注意して下さい」
彼はそのうえでまた言った。
「何をするかわかりませんよ」
「わかりました」
フローラはその言葉に頷いた。そしてアルフレードを見た。

第三幕その三

「まさかとは思うけれど」
「奥様」
ここで使用人が彼女の側にやって来た。
「何かしら」
「ヴィオレッタ様が来られました」
「そう」
彼女はそれに頷いた。
「一人かしら」
「いえ」
だがこの使用人はこれには首を横に振った。
「ドゥフォール男爵と御一緒です」
「そう」
それを聞いて外面上は静かに頷いた。
「どうしたものかしら」
「？何か」
「あっ、何でもないわ」
呟きにはっとして尋ねてきた使用人に対してこう返した。
「有り難う。じゃあ休んでいていいわ」
「有り難うございます」
この使用人にチップを与えたうえで下がらせる。そしてヴィオレッタを迎えた。彼女は薄い水色の絹のドレスを身に纏いその胸には白い椿を飾っていた。そしてその隣に背の高い立派な外見の男を連れていた。彼がドゥフォール男爵である。
「マダム」
彼は部屋に入ると隣にいるヴィオレッタに声をかけてきた。
「はい」
「彼がいますよ」

（えっ）
その言葉にはっとなり部屋の中を見回す。するとカードのテーブルのところにアルフレードが座っているのが見えた。それを見て顔が一挙に蒼ざめる。
（そんな）
ヴィオレッタはこの時この宴に来てしまった自らの迂闊さを呪った。だがそれは顔には出さない。男爵はそんな彼女に声をかけてきた。
「御気をつけ下さい」
ヴィオレッタを気遣う言葉であった。
「彼には近付かないように。宜しいですね」
「はい」
ヴィオレッタは蒼い顔のままそれに頷いた。そしてフローラの前にまでやって来た。
「ようこそ」
「はい」
フローラに挨拶をする。
「まずはこちらに。色々とつもるお話がありまして」
「わかりました」
フローラはヴィオレッタを自分の下に寄せ二人で話をしようとした。
「どうやら私はお邪魔なようですな」
男爵はフローラがヴィオレッタを護っているのを見て安心した。そしてこう言った。
「それではこれで。席を外させて頂きます」
「有り難うございます」
フローラは彼のそんな気遣いが有り難かった。にこりと笑って彼に下がってもらった。そしてヴィオレッタと二人になった。
「あちらでお話になられませんか？」
フローラは奥の部屋を指差してこう声をかけてきた。

「ここでは何ですし」
ヴィオレッタを護る為であった。
「御気持ちは有り難いですが」
しかし彼女はこれを断ろうとした。
「今はここにいたいのです」
「そうですか」
それを聞いて残念そうな顔になった。その間にアルフレードはポーカーで勝ち続けていた。
「よし、ファイブカードだ」
「ちぇっ、負けだよ」
ガストーネは苦い顔をして自分のカードを放り出した。
「ワンペアが二つか。今日はついていないな」
「逆に僕はついている」
アルフレードはニヤリと笑ってこう言った。
「カードにはついているね」
「それは何より」
「もっとも恋にはついてはいないけれどね」
(まずいわね)
フローラはそれを聞いて悪い予感がした。そしてヴィオレッタの方を見た。
「あの」
「何か」
だが彼女は素知らぬ顔でフローラに顔を向けてきた。とりあえず動揺した顔は彼女には見せなかった。それを見てフローラもそれ以上言おうとはしなかった。
「いえ、何も」
「そうですか」
アルフレードはその間にも勝ち続けていた。そしてシニカルに笑い続けていた。
「人間とは欲しいものは手に入らないものなんだね」

「お金は欲しくはないのかい？」
「最初は欲しかったさ」
彼は言った。
「けれどもっと欲しいものがあったんだ」
「それは？」
「恋さ」
ヴィオレッタの方をチラリと見て言う。
「不実な人の恋をね。不実な人にそんなものがあるのかどうかは疑問だけれど」
「浮気女にでも恋をしたのかい？」
事情を知らない客の一人がこう尋ねてきた。
「その通りさ」
（私のこと）
ヴィオレッタはそれを聞いてまた顔が青くなるのを感じていた。
（わざと言っているのね）
その通りであった。アルフレードはなおも言う。
「そんなものに全てを捧げるのはね。馬鹿なことだと気付いたんだよ」
「それでここに来たのだね」
「そういうことさ。浮気女にはそれ相応の報いを与えてやる」
「それがいい」
その事情を知らない客がまた言った。
「不実な女には思い知らせてやれ」
「そうするとしよう」
（何をする気だ）
それを聞いたフローラと男爵は不吉なものを感じた。そしてヴィオレッタを気遣わざるにはいられなかった。
「男爵」
フローラは男爵に声をかけてきた。
「わかっております」

男爵はそれに頷いた。そして静かにカードのテーブルのところにやって来た。そして言った。
「あの」
「あっ、男爵」
「これはようこそ」
客達は彼が参加するものと思い早速席を一つ作った。
「男爵もどうですか」
「確かお好きでしたよね」
「ええ」
彼はあえてにこやかな笑みを作りながらそれに応じた。
「それでは御一緒させて頂いて宜しいですかな」
「どうぞ」
「共に楽しみましょう。ポーカーで宜しいですね」
「はい」
彼は答えながらもその心はポーカーには向けられてはいなかった。アルフレードに向けていた。

第三幕その四

「ではまずこれだけ」
そう言いながら札束を出す。
「コインに換えて下さい」
「わかりました」
ディーラーが言われるままその札束をコインに換える。こうして彼の前にコインの柱が何本も立った。黄金色に光るそれはまるで天界の灯火のようであった。
「では賭けるか。ジェルモン君」
「はい」
アルフレードは自分の名が呼ばれて彼に顔を向けてきた。
「いいかね」
「こちらは何時でも」
彼は不敵に笑ってこう返した。
「いいですよ。それではやりますか」
「うむ。まずはこれだけ」
そう言いながら柱を三本程前に出す。
「これでどうですかな」
「願ったり適ったりです」
彼は笑いながらこう返した。
「これで暫くは生活には困らない」
「御二人でですかな？」
「まさか」
彼はこれにはシニカルに笑った。
「一人でですよ。不実な女のことなんて」
彼は笑いながら言う。
「どうだっていいですよ、もうね」
「そうですか」

彼はあえてこれ以上突っ込もうとはしなかった。
「それではいいです。ではまずは私から」
「はい」
彼はカードを交換した。続いてアルフレードが。
「私はいいです」
男爵は自分のカードを見てこう言った。
「もういいのですか」
「はい」
表情を変えずにこう答える。
「貴方は」
「僕は引かせてもらいましょう」
だがアルフレードはまだ引いた。
「運が来るように」
「わかりました」
こうして二枚引いた。そのうえで彼は言った。
「僕もこれで」
「わかりました。それでは」
まずは男爵がカードを見せた。
「フルハウスです」
「おおっ」
客達はそれを見て声をあげた。
「男爵の勝ちかな」
「アルフレードも遂に運の尽きかな」
そんな話をしていた。だがアルフレードは一人笑っていた。
「フルハウスですか」
「ええ。それが何か」
「それでは僕の勝ちです」
そう言いながら自分のカードを見せた。ストレートフラッシュであった。
「何と」

客達はそれを見てまた驚きの声をあげた。
「またアルフレードが勝った」
「神の御加護か」
「振られた男には神の御加護があるようですね」
「それはどうでしょうか」
だが男爵はそれには懐疑的に返した。
「そうともばかり言えませんぞ」
「おや」
アルフレードはその言葉に挑発的なものを含めて返す。
「そうですかね」
「少なくともそこには誠意がなくては」
「誠意がない相手ならば」
「よく見極めてから言われるのですな」
そう忠告してきた。
「案外見えていないものがあるかも知れません」
「それは確かに」
認めるふうな言葉をここで出してきた。
「ですがそれは悪いものもあるでしょう」
「勘違いでは、それは」
「そうともばかり言えませんよ」
その口調がさらにシニカルなものとなった。
「元々そうした人であったならばね」
「それは侮辱ですかな？」
「ほう、誰に対する？」
男爵は次第に怒りがこみあげてくるのを感じていた。そのうえでこう言ってきたのだ。
「宜しければお話して頂きたいのですが」
「わかりました」
売り言葉に買い言葉であった。彼も言い返した。
「それでは」

「皆さん」
だがここで全面的な衝突とはならなかった。フローラの執事の声がしてきたのである。
「お夜食の準備が整いましたが」
「おお」
客達はそれを聞いて声をあげた。
「今日はヒラメをメインにしましたが」
「ヒラメですか」
「とびきり活きのいいのがふんだんに手に入りましたので。シェフが腕を振るいました」
「それは楽しみですな」
「ええ」
フランス人の美食好きはこの時でもそうであった。かつてメディチ家から嫁いできたカトリーヌ＝ド＝メディチが広め、そして美食王とまで謳われたルイ十四世の時に確立されたと言ってもよい。もっともナポレオンはあまり味わうタイプではなく異様なまでの早食いであったらしいがそこは人それぞれであった。
「では行きましょう、そのヒラメに会いに」
「マダム、期待しておりますぞ」
「是非御期待あれ」
こうして客達はフローラに案内され多くが奥の部屋に入って行った。宴の場には僅かな客達だけが残った。その中にはアルフレードと男爵もいた。

第三幕その五

アルフレードは人がめっきりいなくなった部屋の中を見回した。だがここには目当ての者はいなかった。
「誰かをお探しですかな？」
「いえ」
アルフレードは男爵の言葉に首を横に振った。
「何も」
「それでは続けますか、それとも」
彼はアルフレードに問うてきた。
「食事に向かわれますか」
「もう充分過ぎる程勝ちましたし」
彼は涼しい顔でこう言った。
「もう満足です。今度は別のものを満足させるとしましょう」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうして彼等も夜食に向かった。暫らくして誰かが宴の間に戻ってきた。見ればそれはヴィオレッタであった。
「何てことでしょう」
彼女は青い顔でこう呟いた。
「お話しなければならないのにあの御様子では。どうなるやら」
人を介してアルフレードと話をしたいと言ったのである。だが当人がそれを受けたかどうかは疑念があるのである。
「あれだけ怒っておられるとなると。何が起こるのか」
思うだけで恐ろしかった。彼女はこれから起こるかもしれないことに悩んでいたのだ。
「けれど」
彼が来ない場合も考えられる。それならせめても、と思ったがそれでは何も解決したりはしない。だがその複雑な願いは消えてしま

った。
「御呼びでしょうか」
奥の部屋の扉が開いた。そしてアルフレードがやって来たのだ。
「僕に何か御用でも」
一見恭しく礼儀正しい。だがその声は聞いただけでわかる程の棘があった。
(来たのね)
絶望が心の中に差した。だが同時に決意もした。それを固めて彼女はアルフレードに顔を向けた。
「はい」
彼女はアルフレードを見た。そして身体も向けた。
「ここから引かれることはないですか」
「何故」
アルフレードはヴィオレッタの言葉に口の片端を歪めて応じた。
「何故僕がここを下がらなければならないのです?」
「貴方に危機が迫っていますから」
「また妙なことを」
今度はシニカルに笑った。
「僕に危機がですか」
「はい」
ヴィオレッタは頷いた。
「ですから。すぐにでも」
「それは貴女のことではないのですか?」
アルフレードは聞き入れようとしない。逆にこう返してきた。
「私の?」
「ええ。貴女は自分のことしか考えておられません」
辛辣な口調でこう言う。
「自分のことしかね。僕の時もそうだった」
「それは」
「何か間違いでも」

「それは・・・・・・」
言いたかった。だが言えなかった。その理由は彼女ともう一人だけしか知らない。それだからこそ言うことができなかったのである。
「言えないのですね」
「・・・・・・・・・」
アルフレードから顔を背けて沈黙する。そうするしかなかったのだ。
「やっぱり。僕のことはどうでもいいと」
「私のことは忘れて下さい」
力ない声でこう言うのがやっとだった。
「そして幸せに暮らして下さい。そうすれば」
「どうなるというのですか」
声に怒りが篭ってきた。
「私にはもう」
「僕を捨てて新しい男に抱かれているんだ」
「・・・・・・・・・」
その質問には答えようとしない。顔も背けたままであった。
「相手は誰ですか？」
「それは」
アルフレードの問いにも答えようとしない。アルフレードは少なくともそう感じていた。だが実は違っていたのだ。答えられなかったのだ。
「答えられないのですね」
「いえ」
もうこうするしかない、と思った。心にもないことでもこう言うしかなかった。
「それは」
「男爵ですか！？」
アルフレードは問うてきた。
「ドゥフォール男爵ですね、そうですね」

「はい・・・・・・」
顔を背けたまま頷く。
「彼を愛しているんですね」
「それは・・・・・・」
心にもないことを言うことはできなかった。かって夜の世界にいた時には言うことができたというのに。もう戻ってきても言うことはできなかった。彼女はこうした意味でもう夜の世界にその身は置いていなかったのである。
「どうなんですか、また嘘を仰るつもりですか」
「いえ」
嘘という言葉に反応してしまった。こうなってしまっては後に退くことはできない。
「では仰って下さい、本当のことを」
「言います」
応じはしたがやはり顔は背けたままであった。
「では」
「愛しています」
それを言うだけで心が辛くなった。
「あの方を」
本当は別の者をまだ愛していた。しかしそれを口にすることはもう許されていなかったのだ。それを知らないのはアルフレードが愚かだったからではなかった。だが彼は愚かな行動をとってしまった。
「よくわかりました」
アルフレードはそれを聞き怒気を露わにした声でこう言った。
「貴女のことが。それでは僕も覚悟を決めましょう」
こう言って先程自分が出て来た扉に顔を向けた。そしてこう叫んだ。
「皆さん」
この宴に参加している全ての者を呼んだ。
「来て下さい、すぐに」

「！？」
扉の向こうから気配がした。夜食を摂っている者達がそれに反応したのだ。
「すぐに。御見せしたいものがあります」
「一体何ですか、ジェルモンさん」
客達は扉の向こうからアルフレードに問う。
「何があったというのですか？」
「すぐにわかります」
彼はそう答えた。そしてまた言った。
「すぐにこちらに。お願いします」
「わかりました」
客達はそれに応えた。そしてどやどやと宴の部屋に戻ってきた。
そしてアルフレードのところに来た。
「何の御用件ですかな」
「この女を御存知でしょうか」
アルフレードはヴィオレッタを指差しながら客達に対して言った。
ヴィオレッタはうなだれている。

第三幕その六

「ええ、勿論」
「彼女がどうしたのですか？」
「貴方達はこの女のことを知っているのですね」
「それはまあ」
「しかしそれが何か」
「わかりました。それでは話を続けましょう」
アルフレードは言った。
「この恥知らずな女のことを」
「おい、君」
それを聞いた男爵が前に出て来た。
「彼女を侮辱するつもりか」
「侮辱などではありませんよ」
彼は怒りに満ちた声で答えた。もう怒りを隠そうともしなかった。
「彼女はかって僕に全てを捧げてくれました」
「それは知っている」
男爵は言った。
「自分のものを全て売って。だが僕はそれに気付かなかった」
「それはよくあることでしょう」
フローラが宥めるようにして言った。
「そんなことで怒られるのは」
「分別がないと仰るのでしょうか」
「そうだ」
男爵はそれに頷いた。
「彼女の行動に気付かないのは仕方のないことだ。だが今の君の行動は」
「今行動と仰いましたね」
「それが何か」

「僕は迂闊でした。彼女の行動に気付かなかったのだから。そして今も」
「何をするつもりだ」
「何を？」
声の怒りが増した。
「決まっていますよ」
そう言いながら懐から財布を取り出した。そしてその中の札束を取り出す。先程のポーカーで勝った分だ。見ればかなりのものがあった。
「彼女に受けた恩を返すのですよ」
「恩を」
「そう、この金でね。貴方達には証人になってもらいます」
そう言いながら客達を見渡した。
「宜しいですね」
「何をするつもりなんだ？」
「何をですか」
彼はまた言った。
「こうするのですよ！」
「ああっ！」
アルフレードはヴィオレッタにその札束を投げつけた。ヴィオレッタはそれを受けて叫んだ。そしてあまりのことに気を失ってしまった。
「ヴァレリーさん！」
フローラが慌てて駆け寄る。そしてヴィオレッタを助け起こした。
「何てことをするのですか！」
フローラは顔をキッとあげアルフレードに対して叫んだ。
「それでも貴方は人ですか！」
「そうだ！」
客達も叫んだ。そしてアルフレードを非難する。
「何ということをしたのだ君は！」

「女性に対して何ということを！」
「なっ・・・・・・」
アルフレードは呆然となった。最初は何故非難されているのかわからなかった。だがここに彼をよく知る者が姿を現わしたのであった。
「アルフレード」
「お父さん」
ジェルモンであった。彼は険しい、だが悲しみを帯びた顔で息子を見ていた。
「全て見ていた」
そして彼は息子に対してこう言った。
「全てな。何ということをしてくれたのだ」
「・・・・・・・・・」
彼の全てを知る父に言われようやくわかった。自分が何をしてしまったのかを。
「彼女は御前にどんなことをしてくれたのか。忘れたのか」
「・・・・・・・・・」
「そして御前の知らないこともあったのだ。それは秘密にしておこうと思っていたのだが」
「僕の知らなかったこと」
「そうだ」
父は言った。
「私は彼女が御前を愛しているということを知っている」
「愛している？」
過去形ではないことに気付いた。
「彼女はもう夜の世界の住人ではなかったのだ。御前の側にいたかったのだ」
「では何故」
「全ては御前の為だったのだ」
彼は沈痛な声でこう言った。

「そして娘の為」
「妹の為」
「身を引いてもらったのだ。それは決して言うまいと思ってたが」
「何でそれを」
「言えると思うか？悲しい話だ」
父はまた言った。
「それを言うと彼女が余計に惨めになる。どうしてそれを言えようか」
「けれど」
「けれども何もない。全てはよかれと思ってやったことだが」
そう言いながらアルフレードとヴィオレッタを見た。

第三幕その七

「こんなことになるとはな。後悔しても何にもならないが」
「・・・・・・・・・」
アルフレードは沈黙してしまった。その間に客達はヴィオレッタの周りに集まっていた。そして彼女を気遣う。
「どうか御気を確かに」
「さあ、目を開けられて」
客達の言葉で彼女は気付いた。そしてようやく目を開けた。
「よかった」
「気を取り戻されましたか」
「はい」
彼女は弱々しい声で頷いた。だが顔は蒼白なままである。
「何とか」
「ジェルモン君」
男爵はそれを見届けた後でアルフレードに顔を向けてきた。
「君は大変なことをしてくれた。彼女の名誉を汚してくれた」
「・・・・・・・・・」
「私はこれを見過ごすことはできない。そしてそれを正してやる」
そう言いながら懐から何かを取り出した。白い手袋であった。
それをアルフレードに対して投げつける。それで決まりであった。
「いいな」
「はい」
アルフレードは頷いた。彼もそれから逃げる程愚かではなかった。
「では明日の正午に。場所はルーブルの裏だ」
「わかりました」
アルフレードは応えた。
「いいな。逃げることは許されない。私は剣を持って行く」
「では僕も剣を」

「そうだ。彼女の名誉を晴らす。それでいいな」
「わかりました」
こうして決闘が決まった。ヴィオレッタはその間に何とか立ち上がった。フローラが彼女を支えている。
「アルフレード」
彼に声をかける。だが彼は答えられなかった。自分にはその資格がないのだとさえ思っていた。
「今は言えません。けれど」
彼女は振り絞るようにして言う。
「何時かは。その時は必ず来ます」
「・・・・・・・・・・」
「アルフレード」
ジェルモンは沈黙するしかない息子に対して声をかけてきた。そしてこう言った。
「行こう。今の御前はここにいてはいけない」
「はい」
それに頷くのがやっとであった。顔は蒼白となり遂先程までの怒りは何処かに消え去ってしまっていた。
「明日だ」
男爵が彼に対してまた言った。
「君の罪を償う時は。いいな」
「ええ」
それには応じた。だがそれが最後であり彼は父に連れられ屋敷を後にすることになった。二人で寂しく後にした。
「貴女は」
フローラがヴィオレッタに声をかけた。
「私ですか」
「まだ顔が青いです。休まれた方が宜しいかと」
「いえ」
それを断ろうとする。だがそれを周りの者が止めた。

「駄目です」
「けれど」
「今は御聞き下さい。お願いですから」
「・・・・・・わかりました」
誠意ある言葉であった。それにあがらうことは彼女にはできなかった。こくり、と頷いた。
そしてその場を後にした。そのまま屋敷を後にする。こうしてこの宴の主役達は全て姿を消した。だがこれで全てが終わったわけではなかった。むしろその最後の幕を告げる序曲のようなものであった。

第四幕その一

第四幕　パリを離れて

暗い部屋であった。見れば窓にカーテンがかけられている。まるで太陽の光そのものを拒んでいるようであった。暗がりの中に質素な家具とベッドが見える。ベッドの中には誰かがいた。白い寝巻きを着てその中に横たわっている。白い顔は見れば整っているがそこには生気はない。まるで死人のそれのように青ざめていた。

それはヴィオレッタであった。彼女は青い顔でそこに眠っていた。一見すればもう死んでいるようにも見える。だがここで彼女はふと目を開けた。

「今何時なのかしら」

この暗がりの中ではそんなことすらわかりようがなかった。手許にあった鈴を鳴らす。すると暫くして召使が部屋に入ってきた。

「何でございましょうか」

「まずは窓を開けて欲しいのだけれど」

「わかりました」

召使はそれに従い窓を開けた。開かれたカーテンから眩しいまでの太陽の光が入って来る。ヴィオレッタはそれを見て今がどんな時間なのかを理解した。

「朝なのね」

「はい」

召使がそれに頷いた。

「少し寝ただけだと思ったのに」

「よくお休みでしたよ」

召使はそう応えた。

「随分お疲れのようでしたから」

「もう疲れたも何もないのだけれどね」

力なく笑ってそう応えた。

「今の私には。あとどれだけここにいられるのかも」
「そんなこと仰らないで下さい」
召使はこう言って彼女を宥めた。
「きっとよくなりますよ」
「そうかしら」
笑ったがやはりその笑みは力のないものであった。
「この病は。助からないと思うわ」
「そう思われるとどんな病でもそうですよ」
そう言って励ます。
「病は気から、と申しますし」
「そうかしら」
「そうです」
彼女は力強い声でこう言った。ヴィオレッタの力ない笑みを打ち消すかのように。
「この太陽の光を見て何とも思われませんか？」
「綺麗な朝陽ね」
「今までは夜でしたけれど太陽の光がそれを消したのですよ」
「太陽の光が」
「そしてきっと御主人様の病も。消えますよ」
「そうだといいのだけれどね」
だがどうしても笑みを変えることはできなかった。
「夜の世界にいたから。太陽の光には慣れていないし」
「それは」
「いいのよ。自分のことは自分が一番よくわかってるわ」
声にも力がなかった。
「もうね。これ以上は」
「そんなこと仰らずに。今日は御客様も来られると聞いていますし」
「そうだったの」
それを聞いて少し驚いた声を出した。
「どなたかしら、それは」

「フローラ様です」
召使は答えた。
「朝のうちに来られるそうですよ」
「じゃあもうすぐなのね」
「はい。御会いになれらますか」
「ええ。是非共御会いしたいわ」
ヴィオレッタはそれに頷いた。そして暫くして家の玄関の鈴が鳴った。
「もう来たのね」
ヴィオレッタは玄関の方に顔を向けてこう言った。
「悪いけどこちらに呼んでもらえないかしら」
「わかりました」
召使はこれに頷き部屋を後にする。暫くして彼女に連れられたフローラが部屋に入ってきた。
「お久し振りですね」
「ええ」
ヴィオレッタはベッドの中から彼女に挨拶をした。フローラもそれに応じてきた。彼女はヴィオレッタのベッドの側に置いてあるソファーに腰掛けた。それから話に入った。
「有り難うございます。わざわざ来られるなんて」
「こちらも気懸りでしたから」
フローラはにこりと笑ってこう言った。
「御身体はどうですか」
「身体は痛みますが気分は穏やかです」
彼女は素直にこう言った。
「昨日は神父様に来てもらいました」
「如何でしたか」
「この憂いを消して頂きました。それで心が落ち着いたのです」
「それは何より」
「おかげで夜はゆっくりと休むことができました。そのおかげで今

はとても気分がいいです」
「では御元気なのですね」
「少なくとも気持ちは」
「なら大丈夫です。きっとよくなりますよ」
彼女もこう言ってヴィオレッタを慰めてきた。
「ですからお大事に。宜しいですね」
「はい」
ヴィオレッタは頷いた。ここで外から何やら囃し声が聞こえてきた。陽気な声であった。
「あれは」
「謝肉祭を祝う声です」
フローラがこう答えた。
「今日はパリ中がそれで大騒ぎでしてよ」
「そうなのですか」
だがそれを聞いたヴィオレッタの顔は急激に萎んでしまった。
「どうかされたのですか？」
「いえ」
彼女は元気ない顔で応えた。
「こんな日に一人で床に伏しているなんて。残念で」
「仕方のないことです」
フローラはこう言ってまた彼女を慰めた。
「御身体のことを考えれば」
「けれど」
「けれどもこうしたもありませんよ。まずはお大事に」
「はあ」
「宜しいですね。そして来年一緒に行きましょう」
「行けたらいいですけれど」
「きっと行けますよ」
そうは言いながらも何処か目が泳いでいた。やはり気持ちが何処か上滑りしている。

第四幕その二

「ですからね。今は病を治すことに専念しましょう」
「わかりました」
「丁度いいニュースも入ってきておりますし」
「ニュース」
「ジェルモンさんのことです」
フローラはこう言った。
「アルフレードの」
その名を聞いただけでヴィオレッタの様子が急に変わった。顔に生気が戻ってきたのだ。
「彼がどうかしたのですか？」
「御知りになりたいようですね」
「勿論です」
彼女は答えた。
「どうしたのですか。確かドゥフォール男爵と決闘されて」
「男爵に怪我を負わして暫くバイエルンに身を隠していたのですよ」
「そうだったのですか」
ヴィオレッタはそれを聞いて頷いた。
「決闘に勝ったとは聞いていましたが」
「男爵の怪我も快方に向かっていまして。御父上を介して和解されたそうですよ」
「それは何よりです」
それを聞いてほっと胸を撫で下ろした。
「一時はどうなることかと思っていました」
「そうだったのですか」
「本当に胸の苦しみが消えたようです」
「胸の」
「ええ。これでもう私には憂いはありません」

少し晴れやかな顔でこう言った。
「他には何も」
「果たしてそうでしょうか」
だがフローラはここであえて懐疑的な言葉を彼女に向けてきた。
「といいますと」
「貴女の願いはまだあるのでしょう？」
「いえ」
だがそれには一旦首を横に振ってみせた。
「もう。彼が無事ならそれで満足ですから」
「遠くバイエルンで安全でいる。それだけでよいのですね」
「はい」
彼女は頷いた。
「彼女が無事なら。それでよいです」
「そうなのですか？」
だが彼女はここでまた問うてきた。
「本当に。そうなのでしょうか」
「何が仰りたいのですか？」
執拗に言われると気になる。そう問いただしてきた。
「何かあるようですが」
「ありますよ」
フローラは微笑んでそれに応えた。
「ですから申し上げているのです」
「私に」
「はい」
ここで窓の外から何かが聞こえてきた。それは謝肉祭を祝う人々の声であった。
「さあさあ道を開けろ」
越えは口々にこう言っていた。
「太った牛の凱旋だ。この素晴らしい日を祝おう」
不思議な祭と言うべきか。本来偶像崇拝はこのキリスト教の世界

においては禁じられている。そして牛はかつてモーゼが十戒を授けられた時に神によりその像を崇めることを禁じられている。だがそれが今こうして崇められているのだ。頽廃の香りもそこには漂っていた。

だがそれはヴィオレッタにとっては命の息吹であった。彼女はそれを間近に聞いていた。そして彼女はそれから何かを感じていた。

「さあ皆祝おう、この牛を」

「そして楽しもうではないか」

「落ち着いておられますか？」

フローラは今度はこう問うてきた。

「はい」

「なら宜しいです。それでは」

彼女はやけに勿体ぶって言う。それがヴィオレッタには不思議で仕方なかった。

「貴女に喜ばしいお知らせです」

「私にですか」

「はい。それは」

彼女はにこりと笑っていた。そしてヴィオレッタに対して告げた。

「あの方は今パリにおられます」

「えっ！？」

ヴィオレッタはそれを聞いて思わずベッドから身体を起こした。

「それは本当ですか！？」

「はい」

フローラはそれに頷いた。

「御父上と一緒に。御父上に連れられてこちらに戻られたのです」

「それは本当のことですか！？」

ヴィオレッタはもう一度問うてきた。

「本当に彼がパリに戻って来られたのですね」

「はい、そして」

フローラはまだ言った。

「こちらに向かっておられます。もうすぐ来られることでしょう」
「本当なのね！？」
顔に生気が戻ってきていた。そしてまた問う。
「彼が。私の側に」
「もうすぐ御会いできると思いますよ。待ち遠しいですか？」
「それはもう」
もうその気持ちを隠そうともしなかった。
「今あの扉が開いて彼が来るのかと思うと。それがもう楽しみで」
「そう、もうすぐです」
二人は部屋の扉を見ていた。そこにはまるで希望が輝いているかのようであった。
「彼が来ます。貴女の前に」
「ああ！」
喜びのあまり声をあげた。
「もうすぐあの扉が開いてあの方が」
「貴女の側に。音が聞こえてきませんか？」
「音が」
「ええ、彼の足音が」
耳を澄ます。確かにそれが聞こえてきた。それは扉に向かって近付いてきていた。
「ほら、貴女に御会いする為だけに」
「私の為に」
「今それが止まりました」
確かにそれは止まった。扉の前で。
そして扉が開いた。遂に彼が姿を現わしたのであった。
「ヴィオレッタ！」
「アルフレード！」
二人はそれぞれの姿を認めて互いの名を呼んだ。アルフレードは駆け寄りヴィオレッタを抱き締める。彼女はそれを両手を拡げて待っていた。そして彼を受け止めた。

第四幕その三

「済まない、僕は馬鹿だった！」
アルフレードはまずこう言ってヴィオレッタに謝罪した。
「何も知らずに。とんでもないことをしてしまった」
「宜しいのです」
彼女は泣きながら、だが笑みを以ってこれを許した。
「全ては。許されたのですから」
「全てが」
「はい。だからこそ貴方はここに来られたのです」
ヴィオレッタはアルフレードの顔を上から優しい笑みで以って見ながらこう言った。
「私の下に。これこそが貴方が神に許された証し」
「貴女には許されているだろうか」
「私がどうして貴方を許さないことがありましょう」
そして優しい声でこう言った。
「貴方は私の全て。他の何にも替えられないものだというのに」
「僕が替えられないものだと」
「はい」
彼女はこう答えて頷いた。
「その貴方がここに来られた。私の側に帰って来られた。それだけで充分なのです」
「貴女にあのような仕打ちをした僕に・・・・・・」
アルフレードは今彼女の温かさと心の広さに感激していた。そして見れば彼も泣いていた。
「有り難う。貴女は何と素晴らしい方なんだ」
「私は素晴らしくなんかありません」
だがヴィオレッタはこう言ってそれを否定した。
「私は。夜の世界を彷徨った女です。ですがそれは貴方によって救

われました」
「僕に」
「あの時貴方が私に愛を告げてくれたから。私は夜の世界を出ることができたのです」
「そして僕の側に」
「はい」
彼女はまた頷いた。
「そして今ここに。それまでのことはもう消え去りました」
「それじゃあ今から」
「はい、またはじまるのです」
彼女は告げた。
「私達の新しい暮らしが。それは永遠に続くでしょう」
「僕達の暮らしが」
見れば部屋からフローラも召使も姿を消していた。気を利かして姿を消したのであろうか。だが二人はそれには気付いてはいなかった。ただ二人だけの、愛の世界にいた。
「悲しみも罪も。何もかも消え去って」
「そして僕は貴女の側にいる」
「はい。私もまた貴方の側にいる」
二人は互いに言い合った。
「何時までも」
「そう、何時までも」
二人は互いの心が触れ合うのを感じていた。だがそれだけではなかった。彼等はまた互いに言った。
「天使だろうが悪魔だろうが」
まずヴィオレッタが言った。
「誰にも私達を離すことはできはしないわ」
「ああ」
アルフレードはそれに頷いた。そして彼も言った。
「ヴィオレッタ」

「何？」
「パリを離れないか？」
「パリを」
「そうさ。そして静かな場所で暮らそう」
「二人で」
「勿論さ。それで君はきっとよくなる」
アルフレードもまたヴィオレッタの病は知っていた。だからこそ言った言葉であった。
「この街は君の胸にとってよくない。退廃的なこの街は」
「けれど私は」
だがヴィオレッタはここで眉を顰めさせた。
「この街から離れて生きていくことは」
「できる」
だがアルフレードはこう言い返した。
「できるんだ」
「できるかしら」
「僕がいるから」
「貴方が」
「そう。だからこそできるんだ。二人なら何でも」
「貴方がいれば」
「そして僕には貴女がいれば。他には何もいらない」
「私はそして、昼の世界に生きるのね」
「そう。未来も何もかも私達の上に微笑む」
「何もかもが」
「神が祝福される。もう君は夜の世界にはいない」
「ええ」
「この世界にいるんだ。僕と同じ世界に」
「貴女と同じ世界に」
「だから。行こう」
「はい」

「二人で」
「アルフレード」
彼女はまたアルフレードの名を呼んだ。
「何だい？」
「まずは教会に行きましょう」
「教会に」
「そうよ。貴方が来られたことを神に感謝する為に」
「神に」
「この奇跡を。何時までも忘れない為に」
そう言いながら起き上がろうとする。だがそれは適わなかった。
やはり病のせいであった。それはもう誰の目にも明らかであった。
そして彼女の命の蝋燭のことも。アルフレードにもそれはわかった。
わかりたくはなかったが。
ヴィオレッタは鈴を鳴らした。それで召使を呼ぶ。
召使がやって来た。ヴィオレッタは彼女に対して言った。
「外に出たいのだけれど」
「えっ」
召使はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「あの、今何と」
「聴こえなかったの？外に出たいのだけれど」
ヴィオレッタはまた言った。だが召使はそれを聞いても動こうとはしない。かわりにこう言った。
「あの」
「何かしら」
「今は旦那様と一緒におられる方がいいと思いますが」
「私達はもう何時でも一緒よ」
「しかし」
「ヴィオレッタ」
それを横で聞いていたアルフレードが召使に助け舟を出すようにして言った。

「今はここにいよう」
「けれど」
だがヴィオレッタはそれにあがらおうとした。まるで自分の運命にあがらおうとするかのように。

第四幕その四

「主に報告をしなければ」
「それは何時でもできるよ」
「けれど」
だがそれは出来る筈もなかった。そう語る側からヴィオレッタの顔は青くなっていく一方だったのである。次第に生気が消えていくのがアルフレードにもわかった。抱いているその身体も徐々に冷たくなってきていた。
「ねえヴィオレッタ」
アルフレードは最後の時が近付いて来ようとしているのがわかった。まさかこんなに早く来るとは思ってはいなかった。だがそれでも勇気を振り絞ってヴィオレッタに対して語り続ける。もう逃げるつもりはなかった。
「何かしら」
「君は」
「私は大丈夫よ」
それでもヴィオレッタは言った。
「だから」
「いや、もう駄目なんだよ」
「えっ・・・・・・」
その言葉にヴィオレッタは絶句した。
「駄目って」
「もう貴女もわかっている筈だ。貴女の身体なんだから」
ヴィオレッタの病のことについて言った。
「もう貴女は」
「いえ、そんな筈はないわ」
だがヴィオレッタはそれを認めようとしなかった。何処かではわかっていてもそれを認めることはできなかった。

「私は貴方と一緒にいるのは。何時までも」
「けれどもう」
「そんな筈が。私は何時までも」
「ジェルモンさん」
ここで部屋にフローラが入って来た。
「フローラさん」
「御父様がここに来られたわ」
「お父さんが」
「どうされるの？こちらに来られたいって言っておられるけれど」
「それは」
「お通しして下さい」
ヴィオレッタは消え入りそうな声でこう言った。
「是非共」
「いいのかい？それで」
「ええ」
ヴィオレッタはアルフレードに対して頷いた。
「貴方の御父様にも。祝福してもらいたいの」
「父に」
「あの時私と貴方を離れるように言ってくれた方が祝って下さるなんて。このうえない喜びでしょう？」
「しかし」
「しかしも何もないわ。来て頂きたいの」
「・・・・・いいんだね」
「ええ」
ヴィオレッタは頷いた。
「それじゃあ」
フローラは一旦部屋から消えた。そして暫くしてジェルモンを連れて部屋に現れた。ジェルモンは沈痛な顔でまずは帽子を胸に置きヴィオレッタに対し一礼した。
「私が貴女の前に姿を出せるとは思っておりませんが」

「いえ」
だがヴィオレッタはその言葉には首を横に振った。
「貴方が来て下さることを心待ちにしておりました」
「左様ですか」
「はい。ようこそおいで下さいました」
「私に対してもそのような」
ジェルモンは深い悔悟に襲われていた。それと共にあることを言おうと決意した。
「あの」
「はい」
「私は貴女に謝罪すると共に一つのことを申し上げたいと思います」
「それは」
「貴女を娘として呼びたいのですが」
「私を娘と」
「はい」
ジェルモンはこれに応えて頷いた。
「貴女をそう呼ぶ為に私は今ここに来たのです」
「お父さん、それじゃあ」
「うむ」
ジェルモンの目が優しいものとなった。
「世間の評判なぞ。どうとでもなるものだ」
彼もようやくわかったのだ。
「それは幻想に過ぎない。つまらない者達はどのような相手であっても中傷するものだ。そして真に心が清らかならば神が御加護を授けて下さる」
「神が」
「そう。御前とこの方には神の御加護がある」
アルフレードに対して言った。
「今それがわかった。・・・・・・私は愚かな男だった」
「いえ」

だがヴィオレッタはその言葉に首を横に振った。
「私はそれでもう満足です。貴方にも認めて頂いたのですから」
「何と言えばいいのか」
ジェルモンもまた心を打たれていた。
「私の様な者に」
「貴方によりアルフレードは生まれました」
ヴィオレッタは言った。
「そして私の前に姿を現わして頂きました。これが私の運命を変えたのですから」
「しかし」
「それが何よりの証拠です。それだけでもう」
「何という方だ」
次第に言葉に詰まるようになった。
「私の様な愚かな老人に対しても」
「アルフレード」
ヴィオレッタは今度はアルフレードに対して顔を向けてきた。
「何だい」
「貴方にお渡ししたいものがあるの」
「僕に」
「ええ」
そう言いながら首かけているペンダントを外した。それをアルフレードに手渡す。
「これを」
「ペンダントを」
「その中にね、私の肖像画があるわ」
アルフレードに手渡しながら説明する。
「だから。受け取って。そして私のことを」
「馬鹿な、何を言っているんだ」
今度はアルフレードが信じられなくなった。
「君は僕とずっと一緒にいるんだろ？」

「ええ」
それには頷いた。
「それを。どうして」
「貴方と一緒にいる為に」
ヴィオレッタは言った。
「だからお渡しするのよ。私はその中にいるから」
「この中に君が」
「そして貴方の心の中に」
「僕の心の中に」
「そう」
今にも消え入りそうな声になっていた。だがそれでも言った。

第四幕その五

「永遠に生きるから。貴方の中で」
「そして僕達は何時までも一緒に」
「暮らしましょう。私は死なない」
「君は死なない」
「貴方の中に生きていくのだから。だから死なないのよ」
「そう、魂は死にはしないわ」
フローラがそれを聞いて呟いた。
「貴女は。何時までも生きるのよ」
「全てが終わっても。最後の審判の後で私は貴方を抱き締める」
「その時には僕も君を抱き締める」
アルフレードも言った。
「けれど」
「アルフレード」
ジェルモンが息子に声をかけてきた。
「その時まで待つのだ。だが今は」
「お父さん」
「全ては私の罪だ。私は愚かだった」
「いいえ」
「慰めはいい」
もうジェルモンは自分を偽ることができなかった。もとより偽りはできなかったがそれでも自分の良心に逆らうことができる程彼は悪人ではなかった。善人の仮面を被る程卑劣でもなかった。
「結局私は二人の若者を不幸にしてしまった。愚かな老人だ」
「それは違います」
だがそれをフローラが否定した。
「何故」
「貴方は今この二人を結び付けました」

「もう手遅れだ」
「愛に手遅れはありません」
フローラは毅然として言う。
「結ばれれば。それで全てが実るのです」
「しかしもう」
「ヴィオレッタの言葉は御聞きになられた筈です」
彼女はさらに言った。
「しかし」
「あまり御自身を責められぬよう。貴方は間違ったことをされたわけではありません」
「彼女に別れるように強いたのは」
「それは仕方のないこと」
フローラはそれを不問とした。
「貴方はそうするしかなかった。昼の世界の住人なのだから」
フローラとて夜の世界にいる。だからヴィオレッタのことがわかる。だが同時にジェルモンのこともわかるのだ。彼女でなければわからないことではあったが。
「私とて貴方と同じ立場にいたらそうしたでしょう」
「・・・・・・・・・」
「それが昼の世界の住人の掟、そして彼の為にも」
「アルフレードの為にも」
「彼の妹の為にも。それは仕方のないことです」
「申し訳ない」
こう言うのが精一杯であった。ジェルモンは自分にそう言ってくれたフローラに心の底から感謝した。だがそれでも自分を責めないではいられなかった。
「貴女も一緒に行けたら」
アルフレードはまた言った。
「どんなにいいだろう。貴女と一緒に行けたら」
「それはできないわ」

ヴィオレッタは微笑んで首を横に振った。
「貴方にはまだ見えないでしょう？」
「何が？」
「私が生きる世界が」
「貴女が生きる世界が」
「私は今からそこに行くわ。貴方の中に」
そう言いながらアルフレードの手を掴む。
「永遠に、アルフレード」
最後の言葉を口にした。
「私は貴方の中にいるわ。これからもずっと」
「これからもずっと」
「だから。悲しむことはないわ。私は生きるの」
「僕と一緒に」
「そうよ。けれど今は眠らせてもらうわ」
静かな声でこう言った。
「お休みなさい」
にこりと微笑んだ。力こそなかったが優しい、優雅な笑みであった。
「お休み」
アルフレードも言葉を返した。ヴィオレッタはそれを見て満足したようだった。
ゆっくりと目を閉じる。そのままアルフレードの腕の中で眠りに入った。
「これでもう僕達は離れることがない」
アルフレードは眠りに入ったヴィオレッタを見下ろして言った。
「永遠に。僕達は決して離れない。何があろうとも」
そんな彼等をジェルモン達が見守っていた。彼等の遠くから祭りを祝う声が聞こえてくる。それはまるでアルフレードの心の中に入ったヴィオレッタを祝福するかのようであった。生の喜びを歓声によってたたえていた。

椿姫

完

2005・10・30

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3662f/

椿姫

2011年4月28日00時41分発行